新約聖書馬太傳　全

02-SI
海老澤文庫

耶穌降生一千八百七十七年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書馬太傳

明治十年

日本横濱上梓

價格 銀

02-SI

新約全書　馬太傳福音書

第一章 アブラハムの裔なるダビテのこなる耶穌キリストの
系圖
アブラハム イサクをうみ イサク ヤコブを生 ヤコブ ユダと
その兄弟をうめり
三 ユダ タマルよりて パレスとザラをうみ パレス エスロンをうみ エスロン アラムをうみ
四 アラム アミナダブをうみ アミナダブ ナアソンをうみ ナアソン サルモンをうみ
五 サルモン ラカブよりて ボアズを生 ボアズ ルツよりて オベデをうみ オベデ エッサイをうみ
六 エッサイ ダビデ王をうむ ダビデ王 ウリヤの妻よりて ソロモンを

海老澤有道文庫

うみ七ソロモンレハベアムをうみレハベアムアビアをう
みアビアアサをうみ八アサヨサパテをうみヨサパテヨラム
をうみヨラムウズヤをうみ九ウツズヤヨタムをうみヨタム
アカズをうみアカズヘゼキヤをうみ十ヘゼキヤマナセをう
みマナセアモンをうみアモンヨシアをうめり十一バブロン
にうつさるるときヨシアヨアハズとその兄弟をうみ十二バブロン
にうつされたるのちヨアハズシアテルをうむシアテル
ゼルバベルをうみ十三ゼルバベルアビウデをうみアビウデ
エリアキンをうみエリアキンアゾルをうみ十四アゾル
ザドクをうみザドクアキムをうみアキムエリウデをう
み十五エリウデエリアザルをうみエリアザルマツタンをう
みマツタンヤコブをうみ十六ヤコブマリアの夫ヨセフをう
めり此のマリアよりキリストととなふる耶穌うまれたま
ひき十七その世系をかぞふればアブラハムよりダビデまでい
たるまで十四代ダビデよりバブロンにうつさるるときま
で十四代バブロンにうつされしよりキリストまで十四代
あり○十八それ耶穌キリストのうまれたまふことは左のご
としその母マリアはヨセフと娉となせるのみにていまだ
ともにならざりしとき聖霊に感じてみごもりしがその懐孕
たることあらはれければ十九夫ヨセフただしき人なるゆゑ

まことをはぢしむることをこのまず。ひそかに離縁せん
とおもへり 二十 かくてこのことをおもひめぐらせるをりに
主のつかひのものが夢にあらはれていひけるは。ダビデのこ
ゑヨセフよなんぢ妻マリアをめとることをおそるゝなかれ。
そのはらめるところのものは聖靈によるなり 二十一 これ子を
うまんその名を耶蘇となづくべし。そはその民を罪よりす
くはんとすればなり 二十二 すべてこのことは預言者によりて
主のいひたまひしことぞ 二十三 處女はらみて子をうまんそ
の名をインマヌエルととなふべしとあるに應驗せんため
なり。その名をとけば神われらとともにまするとの義なり

二十四 ヨセフはねむりより起て主のつかひの命ぜしことにした
がひその妻をめとりたれども 二十五 冢子のうまるゝまで牀をと
もにせざりき。そのうまれし子を耶蘇となづけたり

第二章 一 それ耶蘇はヘロデ王のときユダヤのベツレヘムに
うまれたまひしが。そのとき博士たちひがしのくにより
エルサレムにきたり 二 いひけるは。ユダヤ人の王とてうまれ
たまへるものはいづこに在や。われらひがしのくにてそ
の星をみたれば。これを拝せんためにきたれりと 三 ヘロデ王
これをきゝていたくむ。またエルサレムの民もみな然り 四 すべ
ての祭司のをさと民の學者らとをあつめてヘロデとひける

ハキリストのうまるべきところハいづこなるや 五 こたへ
けるハユダヤのベツレヘムなりそハ預言者のしるされた
ることばに 六 ユダヤの地ベツレヘムよなんぢハユダヤの郡の
中にていとちひさきものにあらずわがイスラエルの民を
やしなふべき君そのうちよりいでんといへるなり 七 こゝに
おいてヘロデひそかに博士たちをよび星のあらはれしと
きを詳にとひて 八 このものらをベツレヘムにつかはさんとして
いひけるハゆきて嬰児のことをつぶさにたづねこれにあ
はゞ我につげよわれもまたゆきて拝すべし 九 このもの王の
命をきゝてゆきけり前にひがしのくにゝてみたりし星かれ
らにさきだちてをさなごのをるところにいたりそのうへ
にとゞまりぬ 十 このものらこの星をみていたくよろこび 十一 そ
こで室にいりけるに嬰児のそのはゝマリアとともにをる
を見ひれふしてをさなごを拝し寳盒をひらきて黄金乳香
沒藥など禮物をさゝげたり 十二 その夢にヘロデへかへる
なかれとの黙示をかうむりほかのみちよりその國にかへ
り〇 十三 このものらが去るのち主のつかひヨセフのゆめにあ
らはれていひけるハヘロデをさなごを索てころさんとす
るゆゑに起てをさなごとそのはゝとをたづさへエジプト
にのがれてわがなんぢにしめさんときまでこのところに

とい[illegible] 十四 ヨセフ起(おき)て夜(よる)をさなごとその母(はゝ)とをたづさへ
エジプトにゆき 十五 ヘロデの死(しぬ)るまでかしこにとゞまれり。こ
れ主(しゆ)よげんしやによりて、わが子(こ)をエジプトよりよび
いだせりといひたまひしにかなはせんためなり 十六 こゝに
おいてヘロデはかせにあざむかれたるをしりて甚(はなは)だいかり
人(ひと)をつかはして博士(はかせ)にくはしくとひたる時(とき)をもちて
ベツレヘムとそのさかひのうちなる二歳(ふたつ)したのをさなご
をことごとくころせり 十七 こゝにおいて預言者(よげんしや)エレミヤのことばに
十八 なげきのこゑしみいたく憂(うれ)ふるこゑラマにきこゆラケル
その子(こ)どもをなげきその子(こ)どものなきによりて慰(なぐさ)まずと
いひしことのかなへり 十九 かくてヘロデしにしのち主(しゆ)のつかひ
ヨセフのゆめにエジプトにてあらはれいひけるは 二十 おき
て嬰兒(をさなご)とその母(はゝ)とをたづさへイスラエルの地(ち)にゆけ嬰(をさな)
兒(ご)のいのちをもとむるものはすでに死(しね)り 二一 ヨセフ起(おき)てをさな
ごとその母とをたづさへてイスラエルの地(ち)にいたりしが
二二 アケラヲ父(ちゝ)ヘロデにかはりてユダヤの王(わう)たりときゝけ
ればかしこにゆくことをおそる。また夢(ゆめ)につげをかうむり
てガリラヤのはうちにさけ 二三 ナザレといへるむらにいたり
てとゞまれり。これはナザレ人(びと)ととなへられんと預言者(よげんしや)によりてい
はれたる言(ことば)にかなはせんためなり

第三章　そのころバプテスマのヨハネきたりてユダヤの野
に宣つたへて　二　いひけるハ天國ハちかし悔あらためよ　三　これハ
主の道をそなへそのみちすぢをなほくせよと野によばゝる
人のこゑありと預言者イザヤがいひし人なり　四　このヨハネ
ハ身にらくだの毛衣をきて腰にかはのおびをむすび蝗蟲と
野蜜を食物とせり　五　このときエルサレムおよびユダヤ
をことごとくまたヨルダンの四方よりひとびといでゝヨハネに
つき　六　おのが罪をくいあらはしヨルダンにてそのかれより
バプテスマをさづけられたり　七　バプテスマをうけんとて
パリサイおよびサドガイの人々のおほくきたるをみて
これにいひけるハ蝮のたぐひ誰なんぢらにきたらんとす
る怒をさくべきことをつげしや　八　さらバ悔改にかなふ果
をむすべよ　九　なんぢらわれらが先祖にアブラハムありとい
ふことをおもふなかれわれなんぢらにつげん神ハこの石
をもよくアブラハムの子となさしむることあり　十　いまや斧を
樹のねにおかるゝゆゑに善果をむすばざる樹ハきら
れて火になげいれらるべし　十一　われハなんぢらを悔あらた
めさせんとて水をもてなんぢらにバプテスマをさづくれど
わがのちにきたるものハわれにまさりて能力ありわれハそ
の履をとるにもたらずかれハ聖靈と火とをもてなんぢらに

バプテスマをさづけん 十二 手に箕をもちてその禾場をきよめ麦をあつめてその倉にいれ糠はきえざる火にてやくべし ○十三 このとき耶蘇ヨハネにバプテスマをうけんとてガリラヤよりヨルダンにきたりたまふ 十四 ヨハネ辭ていひけるハわれハなんぢよりバプテスマをうくべきものなるになんぢかへつてわれにきたるか 十五 耶蘇こたへけるハしばらくゆるせ如此なしてのたゞしきことハわれらつくすべきなりとこゝにおいてヨハネその言にまかせり 十六 耶蘇バプテスマをうけて水よりあがりきたるとき天たちまちこれがためにひらけ聖靈の鴿のごとくくだりてそのうへにきたるをみたまふ 十七 また天より聲ありていふハわがこゝろにかなふわが愛子なりといへり

第四章 さて耶蘇せいれいにみちびかれ惡魔にこゝろみられんために野にゆきたまふ 二 四十日四十夜くらふことをせずのち饑ぬ 三 こゝろむるものこのときにきたりていひけるハなんぢもし神の子ならバ命じてこの石を餅となせよ 四 耶蘇こたへけるハ人ハパンのみにていくるものにあらずたゞ神の口よりいづるすべてのことばによるべしとしるされたり 五 こゝにおいて惡魔これを聖京につれゆき殿のいたゞきにたゝせていひけるハ 六 なんぢもし神の子ならバおのが身をしもへなげよそハなんぢがために神そのつかひたちに命

ぜんじのつかひ手にてさゝへてなんぢが足の石にふれざるや
うすべしとしるされたり 七 耶蘇このものにいひけるは主たる
なんぢの神をこゝろむべからずとまた錄せり 八 あくま
またこのものをいとたかき山にたづさへゆき世界のくにぐにと
その榮華とをみせて 九 なんぢもしひれふしてわれを拜せ
ばこれらをみななんぢにあたふべしといふ 十 耶蘇このものに
いひけるはサタンよしりぞけ主たるなんぢの神を拜した
ゞこれのみをつかふべしとしるされたり 十一 つひに惡魔このものを
はなれて天使たちきたりつかふ○十二 耶蘇ヨハネのとらはれし
ことをききてガリラヤにゆき 十三 ナザレをさりゼブルンと

ネブタリとのさかひなるうみべのカペナウムにいたりて
こゝにすめり 十四 これ預言者イザヤのことばに 十五 ゼブルンの
地ナブタリの地うみにそひたる地ヨルダンのむかふの地
異邦人のガリラヤ 十六 くらきにをる民はおほいな
る光をみ死地と死蔭にざするものゝうへにひかりいでた
りといひしにかなはせんためなり○十七 このときより耶蘇
はじめて道をつたへ天國はちかづけりあらためよといひ
たまへり 十八 耶蘇ガリラヤのうみべをあゆみてペテロといひ
ふシモンその兄弟アンデレとふたりして海にあみをうてる
をみたりこのふたりは漁者なり 十九 これにいひけるはわれにし

さらバわれなんぢらを人をすなどるものとなさん 二十 かれ
らやがて網をすてゝ耶蘇にしたがふ 二一 こゝよりすゝみけ
るにまたほかの兄弟ふたり即ちゼベダイの子ヤコブとそ
のきやうだいヨハネ父ゼベダイとともに舟にてあみをつ
くろへるをみてこれをよびしに 二二 このものらもやがて舟と父
とをすてゝ耶蘇にしたがへり○ 二三 耶蘇ガリラヤをあまねく
めぐりその會堂にてをしへをなし天國の福音をのべつた
へこの民のうちなるすべての病すべてのわづらひをいや
しぬ 二四 その聲名あまねくスリヤにひろがりしかバ人々す
べてのわづらひ萬殊のやまひにてくるしみなやめるものあ
るひハ鬼につかれたるものや癲癇ちゆうぶのやまひあるもの
などすべてこのもとにつれきたりけれバこれを愈せり 二五 ガリラヤ
とデカポリスエルサレムユダヤヨルダンのむかふよりお
ほくの人々きたりしたがふ

第五章

一 耶蘇おほくの人をみて山にのぼり坐したまひけれ
バ門徒たちもそのもとにきたれり 二 耶蘇くちをひらきて
このものらにをしへいひけるハ 三 心のまづしきものハさいはひ
なり天國ハすなはちその人のものなれバなり 四 かなしむ
ものハさいはひなりそのひとハ安慰をうくべければなり
五 柔和なるものハさいはひなりそのひとハ地土を嗣こと

をうべけれバなり 六うゑかわくごとく義をしたふものハ
さいはひなり。そのひとぐハ飽ことをうべけれバなり 七あは
れみあるものハ福なり。その人ハ矜恤をうべけれバなり
八こゝろの清潔ものハさいはひなり。そのひとぐハ神をみるこ
とを得べけれバなり 九和平をもとむるものハさいはひな
り。その人ハ神の子ととなへらるべけれバなり 十たゞしき
ことのためにせめらるゝものハ福なり。てんごくハそのもの
ちそのものなるをもてなり 十一わがために人なんぢらを詬
謗また迫害いつはりてさまざまのあしきことをいはるゝその
ときハなんぢらさいはひなり 十二よろこびたのしめ天にお
いてなんぢらの報賞おほけれバなり。それハなんぢらよりさ
きの預言者をもかくせめたりき ○十三なんぢらハ地のしほ
なり。鹽もしそのあぢをうしなはゞ何をもてかしほの味よ
かへさん。のちハ用なし。そとにすてられて人にふまるゝの
み 十四なんぢらハ世のひかりなり。山のうへにたてられたる
城ハかくるゝことえず 十五燈をともして斗のしたにおかず
そのあし燭臺におきて家にあるすべてのものをてらさん
十六このごとくひとぐのまへになんぢらの光をかゞやか
せ。さすれバ人々なんぢらのよきおこなひをみて天にいま
すなんぢらの父をあがむべし ○十七われ律法と預言者をとき

つるためにきたれりとおもふなかれ。わがきたりてこれを
すつるにあらず。かへつて成全せんためなり。われ誠にな
んぢらにつげん。天地のつきざるうちに　おきての一點一畫
もとげつくさずしてすたることなし。十九　このゆゑに人もし
誠のいとちひさき一をやぶり、またそのごとく人にをしへ
なば天國において最小ものといはれん。おほよそ道をお
こなひ、かつ人にをしふるものは天國においておほいなる
ものといはるべし。二十　われなんぢらにつげん。學者とパリサイ
の人のただしきよりもなんぢらのただしきことまさらずば
かならず天國にいることあたはじ。〇廿一　いにしへの人に

つげて殺ことなかれ。ころすものは審判にあづからんといい
へることあるはなんぢらがきくところなり。廿二　されどわれ
なんぢらにつげん。ゆゑなくしてその兄弟をいかる
ものはさばきにあづからん。またその兄弟をおろかものよ
といふものは集議にあづからん。また狂妄よといふものは
地獄の火にあづかるべし。廿三　この故になんぢもし禮物
をたづさへて壇にゆきたるときおもひいでてまた兄弟にうらま
るることあるをおもひいださば　廿四　そのそなへものをだん
のまへに留おきてゆきてなんぢの兄弟とやはらぎ後きたり
てそなへものを獻よ。廿五　なんぢをうつたふるもの

ともに途間にあるときはやくやはらげよおそらくハ訟
ふるものなんぢを審官にわたし審官ハまたなんぢをした
やくにわたし遂になんぢハ獄にいれられん 二六 われまことに
なんぢにつげん分釐までもつくのはざるうちハこのところ
をいづることあたはざるなり○ 二七 いにしへの人につ
げて姦淫するなかれといへることあるをなんぢら
きゝしところなり 二八 されどわれなんぢらにつげんおよそ
婦をみて色情をおこすものハこゝろのうちすでにかん
いんしたるなり 二九 もしみぎの眼なんぢを罪におとさバぬ
きいだしてこれをすてよ五體のひとつをうしなふハ

全身地獄になげいれらるゝよりハまさるなり 三〇 もし右の
手なんぢをつみにおとさバこれをきりてすてよ五體
のひとつをうしなふハぜんしん地獄になげいれらるゝより
ハまさるなり○ 三一 またいへることありおよそその妻
をいださんとせバこれに離縁状をあたふべしと 三二 されど
われなんぢらにつげん姦淫のゆゑならでその妻をいだ
すものハこれに姦淫をおこなはしむるなりまたいださ
るゝ婦をめとるものも姦淫をおこなふなり○ 三三 またいにし
へのひとに告ていつはりの誓をたつることなかれなんぢ
らちかふところハこれを主にはたすべしといへることあ

るハなんぢらがきゝしところなり 三四 されどわれなんぢら
につげん さらに誓ことなかれ 天をさしてちかふなかれ こ
れ神のくらゐなればなり 三五 地をさしてちかふなかれ こ
れ神の足発なればなり エルサレムをさしてちかふなかれ こ
れ大王のみやこなればなり 三六 なんぢのかしらを
さしてちかふなかれ なんぢひとすぢの髪だにしろくしくろ
くすることあたはざればなり 三七 なんぢらたゞ是々否々と
いへ これよりすぐるハ悪よりいづるなり ○ 三八 目にて目を
つくのひ歯にて歯をつくのへといへることあるハ なんぢ
らがきゝしところなり 三九 されどわれなんぢらにつげん 悪

に敵することなかれ 人なんぢの右の頬をうたばまたほかの
の頬をもめぐらしてこれにむけよ 四十 なんぢをうつたへて
裏衣をとらんとするものには外服をもまたとらせよ 四一 人
なんぢに一里の公役をしひなばこれとともに二里ゆけ 四二
なんぢに求るものにはあたへ 借んとするものをしりぞく
るなかれ ○ 四三 なんぢの隣をいつくしみてその敵をにくむ
べしといへることあるハなんぢらがきゝしところなり 四四
されどわれなんぢらにつげん なんぢらの敵をいつくしみ
なんぢらを詛ものを祝し なんぢらをにくむもの
なやめ迫害ものゝためにきたうせよ 四五 かくするハ天

これなんぢらが父の子となられんためなり。それ天の父ハその
日をよきものにもあしきものにもてらし雨をたゞしきも
のにもたゞしからざるものにもふらせたまへり 四六なんぢ
ら自己をあいするものを愛するハなにの報賞かあらん。み
つぎとりもそのせざらんや 四七安否を兄弟にのミとハゞ人の
よりなんのまさりたることかあらん。税吏もかくせざらん
や 四八このゆゑに天にいますなんぢらの父の純全がごとく
なんぢらも純全なるべし

第六章

一なんぢら人にみせんためにそのたゞしきを人のま
へに行ことをつゝしめ。しからざれバ天にいますなんぢ
らの父よりむくいハなかるべし 二このゆゑに施濟をなすとき人
のあがめをえんために會堂や街衢にて僞善者のごとく鼓を
ふきならすことなかれ。まことになんぢらにつげん。この
ものらハすでにその報賞をえたり 三なんぢらほどこしをす
るとき右の手のなすことを左の手にしらするなかれ 四如
此するハそのほどこしのかくれんがためなり。さらバ暗中
にみたまふなんぢの父ハあらはに報たまふべし○ 五なん
ぢいのるとき僞善者のごとくするなかれ。かれらハ人に
みられんがために會堂や街衢のすみにたちていのること
をこのむ。まことになんぢらにつげん。かれらハすでに

その報賞をえざりし六なんぢハいのるときハ密室にいり門を
とぢてかくれたるにいますなんぢの父にいのれさらバかく
れたるにみたまふなんぢの父ハ明顯にむくいたまふべ
し七なんぢらいのるときハ異邦人のごとくくりかへしご
とをいふなかれかれらハ言おほきをもてきかれんとおも
へり八このゆゑにかれらにならふことなかれなんぢらの
父ハねがはざるさきにそのなくてならぬものをしりたま
へバなり九さればなんぢらかくいのるべし。天にまします
われらの父よ。ねがはくハ聖名をあがめさせたまへ十神國
をきたらせたまへ。聖旨の天になるごとく地にもなさせた
まへ十一われらのなくてならぬ糧をけふもあたへたまへ十二
われらに罪ををかすものをわれらがゆるすごとくわれらのつ
みをも免したまへ十三われらをあしきこゝろみにあはせず
惡よりすくひいだしたまへ。國と權と榮ハなんぢの
ながくたもちたまふものなれバなり。アーメン十四なんぢらもし
人のつみをゆるさバ天にましますなんぢらの父もまたな
んぢらをゆるしたまはん十五されどもし人のつみをゆるさ
ざれバなんぢらの父もなんぢらの罪をゆるしたまはざるべ
し〇十六なんぢら斷食するとき偽善者のごとく憂容をする
なかれかれらハだんじきを人にしらせんために顔色をそこ

なふことなかれ。まことになんぢらにつげん。かれらはすでにその
むくひをえたり 十七 なんぢ断食するときはそのかしらにあぶら
をぬり面をあらへ。これ断食することを人にみえ
ずして暗中にいますなんぢの父にあらはさんがためなり
さらば暗きにみたまふなんぢの父はあらはに報いた
まふべし○十九 蠹くひ銹くさり盗うがちてぬすむところの
地にたからをたくはふることなかれ 二十 蠹くひ銹くさらず盗
うがちてぬすまざるところの天にたからをたくはふべし 二一
そはなんぢらの財寶のあるところに心もまたあるべければ
なり○二二 身のひかりは目なり。もしなんぢの目あきらか

ならば全身もまたあきらかなるべし 二三 もしなんぢの目あ
しからば全身くらかるべし。このゆゑになんぢのうちの光
もしくらからばその暗きこといかに大ならずや○二四 人はふ
たりの主につかふることあたはず。それはこれをにくみかれ
を愛しこれをおもんじかれをかろしむべければなり。なんぢら
神と財貨とにかねつかふることあたはず 二五 このゆゑにわれ
なんぢらにつげん。生命のためになにを食ひなにをのまんと
身のためになにを衣んとおもひわづらふことなかれ。いの
ちは糧よりまさり身はころもよりもまさるものならず
や 二六 なんぢらそらの鳥をみよ。稼ことなくかることもせず

倉にたくはふることなし。されどなんぢらの天の父はこれをやしなひたまへり。なんぢらはこれよりもはるかにまさるものならずや 二七 なんぢら誰かよくおもひわづらひてそのいのちを寸陰ものべえんや 二八 またなにゆゑに衣のことをおもひわづらふや。野の百合花はいかにしてそだつかをおもへ。勞ず紡がざるなり 二九 されどなんぢらにつげん ソロモンの榮華の極のときだにこの花のひとつほどにもよそほはざりき 三十 神はけふ野にありてあす爐になげいるる草をかくのごとくよそほひたまへば ましてなんぢらをや。あゝ信仰うすきものよ 三一 さればなにをくらひなにを飲なにを衣んとておもひわづらふなかれ 三二 これみな異邦人のもとむるものなり。なんぢらの天の父はすべてこれらのもののなくてならぬことを知りたまへり 三三 なんぢらまづ神の國とその義とをもとめよ。さらばこれらのものはみななんぢらに加らるべし 三四 このゆゑに明日のことをおもひわづらふなかれ。明日は明日のことをおもひわづらへ。一日の苦勞は一日にて足れり

第七章

人のつみをさだむることなかれ。おそらくはなんぢらもまた罪にさだめられん 二 なんぢらが人のつみを定るごとくおのが罪をもさだめらるべし。なんぢらが人を量ご

くゝおのれもはからるべし 三 なんぢ兄弟の目にあるちり
をみておのが目にある梁木をさとらざるはなんぞや 四 おの
れの目にうつばりのあるにいかで兄弟にむかひてなんぢ
が目にある物屑をとりのぞかせよといふことをえんや 五
偽善者よまづおのれの目よりうつばりをとりさらば兄弟
の目より物屑をとりさるやうあきらかにみゆべし 六 犬に
聖物をあたふることなかれまた豕のまへになんぢらの珍珠を
なげあたふることなかれおそらくは足にてこれを踐ふり
かへりてなんぢらをかみやぶらん 七 求よさらばあたへら
れたづねよさらばあひ門をたゝけよさらばひらかるべし
ことを得ん 八 すべてもとむるものは得たづぬるものは
あひ門をたゝくものはひらかるべければなり 九 なんぢら
のうち誰かその子パンをもとめんに石をあたへんや 十 ま
た魚をもとめんに蛇をあたへんや 十一 さればなんぢらあし
きものながら善賜をその子にあたふるをしる。まして天に
いますなんぢらの父はもとむるものによきものをあたへ
ざらんや 十二 このゆゑにすべて人にせられんとおもふこと
はなんぢらもまた人にもそのごとくせよこれ律法と預言者な
るなり 〇 十三 せまき門よりいれよほろびにいたる路はひろ
くその門はおほいなりこれよりいるものおほし 十四 生にい

たるみちハせまくその門ハちひさしその路をうるものすくな
しされバ○十五いつハりの預言者をつゝしめよこのものらハ綿羊
のころもきてなんぢらにきたれども内ハあらき豺狼なり
十六これその果によりてしるべし誰かいばらより葡萄をと
り、あざみより無花果をとることをせん十七かくてすべて善樹ハよ
き果をむすび、あしき樹ハあしきみをむすべり十八よききハ
悪果をむすぶことあたはずあしき樹ハよきみをむすぶことあたハざ
るなり十九すべてよきみをむすばざる樹ハきられて火にな
げいれらる二十このゆゑにその果によりてこれをしるべ
し○二十一われをよびて主よ主よといふものことごとく天國に

いるにあらずこれにいるものハたゞわが天にいます父の
旨にしたがふもののみなり二十二その日おほくのもの我にいひて主よ
主よ主の名によりてをしへ主の名によりて鬼をおひ主の
名によりておほく異能をなしゝにあらずやといふものお
ほからん二十三そのときわれかれらにつげてなんぢらを
しらず悪をなすものよわれをはなれされといはん二十四この
ゆゑにわがこのことばをきゝておこなふものを磐
のうへに家をたてたるかしこき人にたとへん二十五雨ふりお
ほみづいで風ふきてその家をうてどもたふれざりし
これいはを根基となしたればなり二十六およそわがこのことば

そをきゝておこなはざるものは沙のうへに家をたてたる
おろかなる人にたとへん 二七 あめふりおほ水いでゝかぜふき
てその家をうてばつひに傾覆てそのたふれおほいなり
二八 耶穌これらのことを言竟たまへるときにあつまりたる人
人そのをしへをおどろきあへり 二九 そは學者のごとくならで
ちから權威をもちたるもののごとくをしへたまへばなり

第八章

耶穌やまをくだりしときおほくの人々これにしたがひ
り 二 癩病のものきたりて拜していひけるは主もし
なんぢのみこゝろならばわれをきよくなしたまふべし 三 耶穌手をの
べかれにつけていひけるはわがこゝろなり潔なるべしといひけれ
ばらいびやうたゞちにきよまれり耶穌これにいひけるは
慎て人にかたるなかれたゞゆきておのれを祭司にみせか
つモーゼが命ぜしそなへものをさゝげてこれらに證據と
せよ○五 耶穌カペナウムにいりしとき百夫の長きたりねが
ふていひけるは 六 主よわがしもべ癱瘋をやみ家にふしゐ
てはなはだくるしめり 七 耶穌いひけるはわれゆきてこれを
いやすべし 八 百夫の長こたへけるは主よわれはなんぢ
をわが家裏にいれまつるはおそれおほしたゞ一言をのべ
したまへわが僕はいえん 九 そはわれ人の權威の下にあ
るものなるにわがもとにもまた兵卒ありてこれにゆけとい

へばゆきこのものにきたれといへばきたる我しもべにこれを
なせといへばすなはち行ふゆゑなり 十 耶蘇これをきゝて
あやしみしたがへる人々にいひけるは。われまことになん
ぢらにつげんイスラエルのうちにだにいまだかゝる篤信に
あはざるなり 十一 またなんぢらにつげんおほくのひとびと東
より西よりきたりてアブラハム イサク ヤコブとともに天國
にざし 十二 國の諸子はそとのくらきにおひいださるべしそこに
てなげきし切齒をすることあらん 十三 耶蘇ひやくにんの長に
ゆけなんぢが信仰のごとくなんぢに成べしといひたまへ
るそのときに僕はいえたり ○ 十四 耶蘇ペテロの家にいりて

のしうとめの熱をわづらひふしゐたるをみて 十五 その手に
さはりければすなはち熱さりぬ。婦おきてこれらに供事ふ
ひくれたるときひとびと鬼につかれたるものをおほくつれ
きたりければ耶蘇ことばにて鬼をおひいだし病あるもの
をことごとくいやせり 十七 預言者イザヤによりていはれつるわ
れらの恙をうけわれらの病をおふといひたまひしにかな
はせんがためなり ○ 十八 さて耶蘇おほくの人々のおのれを
めぐれるをみて門徒に命じむかふの岸へゆかんとしたま
ひしに 十九 ある學者きたりていひけるは師よいづこへゆき
たまふともしたがはん。耶蘇これにいひけるは狐はあ

あなありそらの鳥ハすありされど人の子ハまくらするところ
なかりし 二一 またでしのひとりいひけるハ主よまづゆきて父
をほうむることをわれにゆるせ 二二 耶蘇いひけるハわれに
したがへ死たるものにそのしにたるものをほうむらせよ○
二三 耶蘇ふねにのりけれバ門徒たちもこれにしたがふ 二四 こ
のときおほいなる颶風おこりて舟をおほふばかりなる浪
たちしに耶蘇ハいねたり 二五 でしたちもこれにちかづきてお
こしいひけるハ。主よすくひたまへわれらほろびんとす 二六
耶蘇かれらにいひけるハ信仰うすきものよなんぞおそるゝ
やつひにおきて風と海とをいましめければおほいにお
だやかになりぬ 二七 人々あやしみていひけるハいかな
る人ぞこの世もうみもこれにしたがひたり○ 二八 耶蘇むかふ
のきしなるガダラ人の地にいたるとき鬼にとりつかれたるもの
ふたりそのはかよりいでゝこれをむかふ。兇猛こと
さらにはなはだしくしてそのみちを人のとほることあたはざり
しほどなり 二九 このものさけびていひけるハ神のこ耶蘇よなんぢ
われらとなんぢとなんの與あらんやいまだ時いたらざるにきたり
てわれらをせめんとするか 三〇 そのあたりに豕のおほ
くのむれ食しゐけれバ 三一 おに耶蘇にねがひていひけるハ
もしわれらをおひいださんとならバ豕のむれにいることを

をゆるせ 三二 かれらにゆけといひければ鬼いでゝぶたのむれにいりしにみよすべての群さかしよりこけて海にいり水にしづみたり 三三 牧者どもむらににげゆきてこのことゝ鬼につかれたりしもののことゞもをつげしかば 三四 耶蘇にあはんとて邑のものこぞりていできたりこれを見てこの境をいでんことをねがへり

第九章

耶蘇ふねにのりわたりて故邑にいたりければ 二 癱瘋にて床にふしたるものをひとびと舁きたり。耶蘇かれらが信ずるをみてちうぶのものにいひけるは子よこゝろやすかれなんぢの罪ゆるされたり 三 ある學者たちこゝろのうちにいひけるはこの人はけがしごとをいへり 四 耶蘇その心のおもひをしりていひけるはなんぢらいかなれば心に惡をおもふや 五 なんぢの罪ゆるされたりといふと起てあゆめといふといづれかやすき 六 それ人の子地にて罪をゆるすの權あることをなんぢらにしらせんとてちうぶに癱瘋のものにおきてなんぢのとこをとり家にかへれといひければ 七 おきてその家にかへりぬ 八 人々このことを見てあやしみかつかゝる權を人にあたへたまひし神をあがめたり 九 耶蘇こゝよりすゝみゆきマタイとなづくる人の稅關にざしゐけるをみてわれにしたがへといひければ起てしたがへり 十 耶

蘇のかたハいへに食するとき税吏つみある人おほくきたりて耶蘇およびその弟子とゝもにざしけれバ 十一 パリサイの人これをみてその門徒にいひけるハなんぢらの師ハなにゆゑにみつぎとりや罪あるひとゝともに食するや 十二 耶蘇きゝてこれにいひけるハすこやかなるものハ医士のたすけをもとめず たゞ病あるものこれをもとむ 十三 なんぢ矜恤をこのみて祭祀をこのまずといふ此ハいかなることかゆきてまなぶべし それハ我がきたるハたゞしき人をまねくためにあらず罪あるひとをくいあらためさせんがためなり 十四 そのときヨハネの弟子耶蘇にきたりていひけるハわれらとパリサイの人ハしばしば断食するに師の弟子のだんじきせざるハなにゆゑぞ 十五 耶蘇これにいひけるハ新郎の友そのはなむことゝもにをるうちハかなしむことをえんや将来はなむことひきわかるゝ日きたらんそのときにハ断食すべきなり 十六 あたらしき布をもてふるき衣をつくろふものハあらじ そハ補ところのものかへつてころもをやぶりその綻もいよ〳〵はなはだしからん 十七 またあたらしき酒をふるきかはぶくろにいるゝものハあらじ もししかせバ囊さりさけ酒もれいでゝそのふくろもまたむなしうならん新囊にあたらしきさけをいるれバふたつながらたもつ

べし○十八耶穌これらのことをいへるとき或宰きたり
拜していひけるハわがむすめいまゝさに死りされどきたりて
なんぢ手をつけたまはゞ生べし 十九 耶穌たちてこれにしたが
ひその門徒もともにゆく 二十 十二年血漏をわづらひたる婦
うしろよりきたりてその衣のすそにさはれり 二一 そハこゝ
ろのうちにたゞそのころもにさはるとも愈んとおもへばなり 二二 耶穌ふりかへ
り婦をみていひけるハむすめよ心やすかれなんぢの信
仰なんぢをいやせり。すなはちこのときより愈たり 二三 耶穌
宰の家にいたりて笛ふくものとさわがしき人の
おほきをみて 二四 これにいひけるハ退ぞけむすめハ死る

にあらずたゞいねたるのみといひけれバ人々耶穌をあざけりわらふ 二五
人々を出されて耶穌いりてその手をとりしに女おきあが
り 二六 このきこえあまねくその地にひろがりぬ 二七 耶穌そこ
をさるときふたりの瞽者さけびてよびいひけるダビデ
の子よ我らをあはれみたまへ 二八 耶穌いへにいりしに瞽
しひきたりけれバこれにいひたまひけるハ我このこ
とをなしうると信ずるやこたへけるハ主よ然り 二九 耶穌
ハそのものの目に手をつけてなんぢらの信ずるごとくなんぢ
らになるべしといひければ 三十 その目ひらけり耶穌きびしく
くいましめていひけるハつゝしみて人にしらするな

なかれ 三一 されどもかれらいでて あまねくその地に耶穌の名をいひひろめたり ○ 三二 めしひのいづるとき ひとびと鬼につかはれたる喑啞を耶穌につれきたりしに 三三 鬼おひいだされしかば おしものいへり。衆人あやしみて いひけるは イスラエルのうちにて かゝる事は いまだかつて見ざりき 三四 パリサイの人いひけるは このものは 鬼のかしらによりて 鬼をおひいだせるなり ○ 三五 耶穌あまねく むらざとをめぐり その會堂にてをしへをなし 天國の福音をのべつたへ 民のうちなるすべての病をいやし わづらひをいやせり 三六 衆人のかふものなき羊のごとくなやみまどひ流離になりしゆゑに これを見てあはれみたまへり 三七 そのときでしたちにいひけるは 收穫はおほくして人はすくなし 三八 ゆゑに その主にこひて ものをとこのりいれさせたまはんことをねがふべし

第十章 さて耶穌その十二弟子をよびよせて けがれたる鬼をおひいだし またすべてのやまひすべてのわづらひをいやす權をたまへり ○ 二 それ十二使徒の名はさのごとし 首めはペテロととなづけたまひしシモン その兄弟アンデレ ゼベダイの子ヤコブ そのきやうだいヨハネ 三 ピルポ バルトロマイ トーマ 稅吏マタイ アルパイの子なるヤコブ タッダイとなづくるレッバイ 四 カナンのシモン イスカリオテのユダ これまたそ

ち耶穌をわたせしものなり〇五 耶穌この十二をつかはさんとして命じいひけるは異邦の途にゆくなかれまたサマリヤ人のむらにもいるなかれ 六 ただイスラエルの家のほろびたる羊にゆけ 七 ゆきて天國ちかきにありとのべつたへよ 八 病のものをいやし癩病ときよくし死たるものをよみがへらせ鬼をおひいだすことをせよなんぢら價なしにうけたればあたへはあたひなしにほどこすべし 九 なんぢら金または銀またはさい錢をたくはへおぶるなかれ 十 たびぶくろ二のしたぎ履つゑももたざれそのゆゑははたらくものはその食物をうるは宜なり 十一 いづれの鄉邑にいるともそのうちの好人をたづねていづるまではそこにとゞまれ 十二 人のいへにいらばその平安をいのれ 十三 その家もしやすきをうくべきものならばなんぢらのねがふ平安はそのいへにいたらんもしやすきを受べからざるものならばなんぢらの祈はやすきはなんぢらにかへるべし 十四 およそなんぢらを接ずなんぢらの言をきかざるものあらばその家またはその邑をさるとき足のちりをはらへ 十五 われまことになんぢらにつげん審判の日にはソドムとゴモラの地はこのむらよりもなほやすからん〇 十六 われなんぢらをつかはすは羊を狼のなかにいるるがごとしゆゑに蛇のごとくさとく鴿のごとくおとなし

このゆゑにつゝしみて人にこゝろせよ。それ人なんぢらを集議
所にわたしまたその會堂にてむちうつべければなり 十八 また
なんぢらわが縁故によりて侯伯および王のまへにひかるべし。こ
れその人々と異邦人に證をなさんがためなり 十九 人なんぢら
を解さばいかにまたなにをいはんとおもひわづらふことなかれ。そ
のときいふべきことはなんぢらに賜るべし 二十 それなんぢ
らがいふにあらず。なんぢらの父の靈そのうちにありてい
ひたまふなり 二一 兄弟はきやうだいを死にわたし父は子を
わたし子はふたおやに逆ひてこれをころさしむべし 二二 また
なんぢらわが名のためにすべての人ににくまれん。され

ど終までしのぶものはすくはるべし 二三 この邑にて人なんぢ
らをせむるならばほかのむらにのがれよ。われまことになん
ぢらにつげん。なんぢらイスラエルのむら〳〵をめぐりつくさ
ざるうちに人の子はきたるべし 二四 でしはその師よりまさらず
しもべは主よりまさらざるなり 二五 でしはその師のごとく
僕はそのあるじのごとくならば足ぬべし。もし人あるじを
よびてベルゼブルといひしならばましてその家のものをや 二六 この
ゆゑにかれらをおそるゝことなかれ。それ掩藏れてあらはさ
れざるものなくかくれてしられざるものなければなり 二七
われ暗中にていひしことをなんぢらは明處にてつげよ。

耳をつけてきゝしことを屋上にてひろめよ 二八 身をころして
しかも霊魂をころすことあたはざるものをおそるゝなかれ。
唯なんぢらたましひとからだを地獄にほろぼしうるも
のをおそれよ 二九 二羽の雀は一銭にてうらるゝにあらずや
しかるになんぢらの父のゆるしなくばそのいちはも地に
おつることあらじ 三〇 なんぢらのかしらの髪までことごとくかぞ
へらる 三一 ゆゑにおそるゝなかれなんぢらはあまたの雀よ
りもまされり 三二 されバおほよそ人のまへにわれをしると
いはんものをわれもまた天にいますわが父のまへにこれ
をしるといはん 三三 人のまへにてわれをしらずといはんもの

をばわれもまた天にいますわが父のまへにこれをしらずと
いふべし ○ 三四 地におだやかをいださんためにわれきたれ
りとおもふなかれ泰平をいださんとにあらで刃をいださ
んためにきたれり 三五 それわがきたれるは人とその父にそむ
かせ女をその母にそむかせ媳をその姑にそむかせんがた
めなり 三六 人の敵はそのいへのものなるべし 三七 われよりも
父母をいつくしむものはわれにかなはざるものなり。われ
よりも子女をいつくしむものはわれにかなはざるものな
り 三八 その十字架をとりてわれにしたがはざるものもわれ
に宜ざるものなり 三九 その生命をうるものはこれをうしな

ひ我ためにいのちをうしなふものハこれを得べし 四十 なんぢ
らを接るものハ我を接るなり また我を接るもの
ハわれをつかはせしものを接るなり 四一 預言者なるをも
てその預言者を接るものハ預言者のむくいをうべく
け義人なるをもてそのただしき人をうくるものハただし
きひとの報賞をうく 四二 わが門徒なるをもてそのちひさき
ひとりのものにひやゝかなる水一杯をあたふるもの
ハ誠にわれなんぢらにつげん このものかならずそのむくいを失はじ

第十一章

耶穌その十二でしに誡をあたへをはりてそこをさり道
をしへひろめんがためにかれらの諸邑にゆけり 〇二 さ
てヨハネ獄にてキリストのなせしわざをききてそのでし二人
をこのまへにつかはして 三 いはせけるハ来るべきものハなん
ぢなるかまたハ他にまつべきか 四 耶穌こたへてい
ひけるハなんぢらが聞ところみるところのことを
ヨハネにゆきてつげよ 五 瞽者ハみ跛者ハあゆみ癩病ハき
よまり聾者ハきこえ死たるものハいきかへり貧者ハふく
いんをきかせらる 六 おほよそわがためにつまづかざるも
のハ福なり 〇七 このものどものかへるのち耶穌ヨハネのことを
ひとびとにいひけるハなんぢら何をみんとて野にいでし
や風にうごかさるる葦なるか 八 さらバなにをみんと

んとていでしや美服をきたる人なるか。やわらかきころもを
きたるものハ王宮にあり
九 さらバなにをみんとていで
しや預言者なるかしかり然ながらなんぢらにつげんこれハよげ
んしやよりもまさりたるものなり
十 それハなんぢらにさきだ
ちて道をそなふるわが使者をつかハすなんぢのまへにおくら
んと録されたるハすなハち是なり
十一 まことになんぢらにま
つげん婦のうミたるもののうちいまだバプテスマのヨハネ
より大なるものもおこらざりきされど天國のいとちひさ
きものもこのものよりハおほいなるなり
十二 バプテスマのヨハネ
のときより今にいたるまで人々もはげみて天國をとらんと
はげみたるものハこれをとらへたり
十三 それすべての預言者
と律法のよげんしたるハヨハネのときまでなりけり
十四 も
しなんぢらわがことばを承ることをこのまバきたるべき
エリアハこれなり
十五 耳ありてきこゆるものハきくべし○
十六 これをこの世をなにゝたとへんや童子ちまたにざしてその侶
をよびてこれにいふ笛ふけどもなんぢらおどらずまた哀をうたへど
もなんぢら胸うたずといふに似たり
十八 それヨハネきたり
て食こともせず飲こともせざれバ鬼につかれたるものなりと人
人いへり
十九 人の子きたりてくらふこともし飲こともすれ
バみよ食をたしみ酒をこのむ人また罪あるもの

友なりといふされども智慧ハその子に義とせらるゝなり○二十 そのとき耶穌おほくの異能をなしたまひたる諸邑の人々あらたまざるによりて責いひけるハ 二十一 あゝわざはひなるかなコラジンよおゝ禍なるかなベツサイダよなんぢらのうちにおこなひし異能をもしツロとシドンにおこなひしならばこのまちハはやく麻をき灰をかうむりてくいあらためしなるべし 二十二 されどなんぢらにつげん審判の日にハツロとシドンの刑罰ハなんぢらよりもなほやすからん 二十三 また天にまでもあげられしカペナウムよまた陰府におとさるべしそハなんぢらに行しところなるわざをもしソドマにおこなひしならば今日までもなほたもちしならん 二十四 されどなんぢらにつげん審判の日にハソドマの地ハなんぢらよりもなほやすかるべし

○二十五 そのときイエスこたへていひけるハ天地の主なる父よこのことを智者さときものにかくして赤子にあらはしたまふと謝す 二十六 ちゝよ然りかくのごときハ聖旨にかなへるなり 二十七 父ハすべて萬物をわれにわたせり父のほかに子をしるものなくまた子および子のあらはさんとおもふものゝほかに父をしるものなし○二十八 すべて勞たるものゝまた重をおへるものハわれにきたれなんぢらをやすません 二十九 われハこゝろ柔和にして謙遜ものなればわがくびき

を負てわれにまなべなんぢらこころに平安をうべし 三十 そ
はわが軛はやすくわが荷はかろければなり

第十二章 一 そのころ耶蘇あんそくにちに麦田をすぎしがその
でしたち飢て穗をつみはじめたり 二 パリサイの人これをみ
て耶蘇にいひけるはなんぢのでしは安息日になすまじきこ
とをなせり 三 これにいひけるはダビデおよび從にあり
しものの饑しときなしたることをいまだよまざるか 四 すなは
ち神の殿にいりて祭司のほかはおのれおよびともなる
ものもくらふまじきそなへの餅をくらへり 五 またあんそ
くにちに祭司は殿のうちにて安息日を犯せどもつみな
きことを律法においてよまざるか 六 われなんぢらにつげ
ん殿よりおほいなるものここにあり 七 われ矜恤をこのみ
て祭祀をこのまずといへることのこころをしらば罪な
きものをつみせざるべし 八 それ人の子は安息日の
主たるなり ○ 九 ここをさりてかれらの會堂にいりしに 十
一手なへたる人ありけるがかのものら耶蘇をうつたへんとて
これにとひけるは安息日にいやすことをなすべきかと 十一
かれらにいひけるはなんぢらのうちにひとつの羊をもて
るものあらんにもしその羊あんそくにちに坑におちいら
ばこれをとりあげざるもの 十二 人はひつじよりまさること

いくのまさりぞや されバ安息日に善をなすハよし 十三 つひに
その人になんぢの手をのべよといひけれバ のべけれバ その手
かたはうの手のごとく愈 十四 パリサイの人々いでて耶穌を
ころさんとはかりけり 十五 耶穌これをしりてそこをさりしに
おほくの人々これにしたがひけれバ すべて疾病あるものをいやし
いやし 十六 みづからを人にあらはすことなかれと戒たまへり これ
預言者イザヤのいひしことばにかなはせんためなり 十八 みよわがえらびしわが
僕 わがえらびたるわが心にかなひたるわが愛するもの われこれにわ
が靈をあたへん かれ異邦人に公義をしめすべし 十九 かれハあらそはず
譁ことなく喧ことなし 人ちまたにおいてそのこゑをきく

ことなし 二十 眞道をもつて勝をえせしむるまでハ いためる葦を
をることなく けぶれる麻をけすことなし 二十一 異邦人もまた
その名によるべし とあるにかなはせんためなり ○ 二十二 ここに
鬼につかれたるめくらの瘖なるものを耶穌のもとにつ
れきたりければ この瘖のおしをいやしてものいひみゆる
やうになせり 二十三 衆人みなおどろきていひけるハ これダビデ
の子にあらざるか 二十四 パリサイの人きゝていひけるハ この
人ハおにのかしらベルゼブルをつかふにあらざれバ鬼をお
ひいだすことなし 二十五 耶穌そのこころをしりてこれにい
ひけるハ およそわかれてあひあらそふ國ハほろび わかれてあひあら

そふ邑や家はたつべからず 二六 サタンもしサタンをおひい
ださばみづからあひわかるゝなり。さらばその國いかでた
ゝんや 二七 もしわれベルゼブルによりて惡鬼をおひいだせしなら
ばなんぢらの子弟はたれによりておひいだすや。それゆゑにかれ
らなんぢらの裁判人となるべし 二八 もしわれ神の靈によ
りて惡鬼をおひいだせしならば神の國はすでになんぢら
にいたれり 二九 また勇士をまづしばらざればいかでその家
にいりそのたからをうばふことをえんや縛てのちにその
いへをうばふべし 三十 われとともにあらざるものはわれにそ
むきまたわれとともに斂ざるものはちらすなり 三一 このゆゑに
なんぢらにつげん人々のすべてをかすところのつみと神
をけがすことばはゆるさるべし。されどひとり聖靈をけがすこ
とばはゆるさるべからず 三二 言をもて人の子にさからふもの
はゆるさるべし。されどことばをもて聖靈にさからふものは今
世においてもまた來世においてもゆるさるべからず 三三 あ
るひは樹をもよしとしその果をもよしとせよ。あるひは樹
をもあしゝとしその果をもあしゝとせよ。それ樹はその果
によりてしらるゝなり 三四 あゝ蝮のすゑよなんぢら惡にし
ていかで善をいふことをえんや。それ心にみつるより口に
いでくるものなればなり 三五 よき人はこゝろの善庫よりよ

きよきものをいだし悪人ハそのあしきくらより悪きものをいだせり。三六 われなんぢらにつげん すべて人のいふところの虚言ハさばきの日にこれをうつたへらるゝを得ず。三七 それなんぢそのいふことばによりて義とせられまたそのいふことばによりて罪ありとせらるゝなり○三八 このときある學者とパリサイの人々こたへていひけるハ師よ奇蹟をみせたまはんことをねがふと なんぢに讖 三九 こたへてこれらにいひけるハ奸悪なる世ハしるしをもとむ。されど預言者ヨナのしるしのほかハしるしをあたへらるまじ。四十 それヨナが三日三夜うをのはらのうちにありしごとく人の子もみつかよるひる地のうちにあるべし 四一 ニネベの人さばきの日にこの世の人とともにたちて今の世のつみをさだめん かれらハヨナのをしへによりて悔改たり。それヨナよりおほいなるものここにあり 四二 南の女王さばきの日にこの世の人とともにたちていまの世のつみをさだめん。かれハ地の極よりソロモンの智慧をききにきたれり。それソロモンよりおほいなるものここにあり 四三 あくき人よりいでゝ水なきところをめぐり安息をもとむれどもえずして 四四 われいでしいへにかへらんといひてきたりてみれば空虚にしてはききよめかざられたり 四五 遂にゆきておのれよりもあしき七の悪鬼を

たづさへくるにいりてこゝに居ればその人のおちのありさ
まへまへよりなほあしかるべし。このあしき世もまたかく
のごとくならん　四六 耶穌ひとびとにものがたりするときその母と
兄弟はそとにたちてものいはんとてまちけるが　四七 あるひと
耶穌にいひけるは なんぢの母ときやうだいは なんぢにものか
いはんとてそとにたてり　四八 耶穌つげしものにこたへて
いひけるは わが母はたれぞ わが兄弟はたれぞや　四九 手をの
べその門徒をさしていひけるは これわがはゝ わがきやうだ
いなり　五十 それはもろもろのわが天にいます父の旨をおこなふ
ものはこれわが兄弟わが姉妹わが母なればなり

第十三章 この日耶穌いへをいでゝうみべに坐せしに　二 おほくの人
人そのまはりにあつまりきたりければ耶穌はふねにのりてざし
きすべての人々はきしにたてり　三 耶穌たとへをもてさまざま
のことをひとびとにかたりぬ 種まくもののまきにいでしが　四
播るときみちのほとりにおちしたねあり そらの鳥きたり
てついばみつくせり　五 また土うすき磽地におちしたねあ
りたゞちにはえいでたれど　六 日のいでしときやかれしは
根なきがゆゑにかれたり　七 また棘中におちしたねあり
いばらそだちてこれをふさげり　八 また沃壤におちしたね
ありて實をむすべることあるひは百倍あるひは六十倍ある

ひハ三十倍せり 九 耳ありてきこゆるものハきくべし 十 門徒たちきたりてこのときにいひけるハなにゆゑに譬をもてこのひとびとにかたりたまふや 十一 こたへていひけるハなんぢらにハ天國の奥義をしることをあたへたまへどもこのひとびとにハあたへたまはざるなり 十二 それもてるものハ予られてなほあまりあり 無有ものハそのもつところのものをもとらるべし 十三 このゆゑにかれらハ視てもみず聽てもきかずさとらざるゆゑにたとへをもてかれらにかたるなり 十四 イザヤの預言になんぢらハきけどもさとらずみれどもみず 十五 それハこの民めにて見みゝにてきゝこゝろにてさとり悔改てわれにいやされんことをおそれてその心をにぶくし耳をおほひ目をとぢたればなりといひしにかなへり 十六 されどなんぢらの目ハみえなんぢらの耳ハきくがゆゑにさいはひなり 十七 まことにまことになんぢらにつげん おほくの預言者と義人ハなんぢらがみるところをみんとしたれども見ることをえず なんぢらがきくところをきかんとしたれども聞ことをえざりき 大ゆゑになんぢら播種のたとへをきけ 十九 天國のをしへをきゝてさとらざれバあしきものきたりてその心にまかれたるたねをうばふこれ路のほとりにまきたるたねなり 二十 磽地にまかれたるたねハこれをしへをきゝてたゞちによろこ

びらくよろこび 二一 おのれに根なけれバしばしのぞしくのた
めに患難あるひハせめらるゝことのおこるときハたちま
ち道につまづくものなり 二二 またいばらのなかにまかれた
る種ハことばをきけどもこの世のこゝろづかひと
貨財のまどひにをしへ、ばふさがれてみのらざるものなり
二三 沃壤にまかれたるたねハことばをきゝてさとり實
をむすぶことあるひハ百倍あるひハ六十倍あるひハ三十
倍をなすものなり○ 二四 またたとへをかれらにしめしていひ
けるハ天國ハ人はたけによきたねをまくにたり 二五
ひとびとのいねたるうちにその敵きたり麥のなかにこれを

むぎをまきてさりぬ 二六 苗はえいでゝみのりたるときにから
すむぎもあらはれたり 二七 あるじの僕きたりていひけるハ
主よなんぢハ美種をまかざりしや。いかにしてからすむ
ぎあるや 二八 あるじいひけるハ敵人ことをなせり、しもべ
主にいひけるハ、われらがゆきてこれをぬきあつむ
るハよきや 二九 答へらくハいなん からすむぎを抜あつ
めんとて麥をもともにぬくべし 三十 收穫までふたつながら
そだておけ。かりいれのとき先からすむぎをぬきあつ
めてやかんためにたばね、麥をバわがくらにをさめ
よといはん○ 三一 またたとへをかれらにしめしていひけるハ

天國ハからしだねのごとし人これをとりてそのはたけにまけ
ば 三二 よろづの種よりハちひさけれども長てハはうのくさ
よりおほいにしてそらの鳥きたりそのえだにやどるほど
の樹となるなり○ 三三 またたとへをかたりていひけるハ
てんこくハ餅だねのごとし婦これをとり三斗の粉のなか
にかくせバことごとくふくれいづるなり 三四 耶蘇たとへをも
てかたりてこれらのことを衆人にかたりたまへり譬にあら
ざればかたりたまハず 三五 これ預言者によりていはくたとへ
をまうけて口をひらき世のはじめよりかくれたることを
いひいださんといへるにかなはせんためなり○ 三六 つ
ひに耶蘇ひとびとをかへして室にいりぬ。そのでしきたりて
いひけるハはたけのからすむぎのたとへをわれらに解た
まへ 三七 こたへていひけるハよきたねをまくものハ
人の子なり 三八 はたけハこの世界なり。よきたねハすなはち天國
の諸子なり。からすむぎハ惡魔のこどもらなり 三九 これをまく
敵ハあくまなり。かりいれハ世のをはりなり。かるものハ
天のつかひたちなり 四十 からすむぎのあつめて火にやかるる
ごとくこの世のをはりにおいてもかくのごとくなるべく
四一 人の子そのつかひたちをつかハしてその國のうちより
すべてつまづきとなるものおよび惡をなす人をあつめて

四二 これを爐の火になげいるべし。そこにてなげき切齒す
ることあらん 四三 このとき義人はその父の國において日
のごとくかゞやかん。耳ありてきこゆるものはきくべし○
四四 また天國ハはたけにかくれたる寳のごとし。人みいださ
ハこれを秘よろこびかへりてその所有をことごとくうりてそ
の田をかふなり○ 四五 またてんこくハよき珍珠をもとめん
とするあきびとのごとし。 四六 一のあたひたかき珍珠をみいだ
さばそのもちものをことごとくうりてこれを買なり○ 四七 ま
たてんこくハ海におろしてさまざまの魚をとる網のごとし 四八
すでにみつればきしにひきあげ坐てそのよきものをうつハ
にいれあしきものをすつるなり 四九 世のをはりにおいても
かくのごとくなるらん。天のつかひたちいでて義者のうちよ
りあしきものをとりわけ 五十 これを爐の火になげいるべし。
そこにて哀哭はがみすることあらん○ 五一 耶穌これらにい
ひけるハこのことをさとりしや。かれらいひけるハ主よ
さとりぬ 五二 耶穌これらにいひけるハされバてんこくについ
てをしへられたる學者ハあたらしきものとふるきものと
をその庫よりいだす家のあるじのごとし○ 五三 耶穌このた
とへをいひをはりてこゝをさりぬ 五四 そのふるさとにいた
り會堂にてをしへしにひとびとあやしみいひけるハこの人

の智慧と異能ハいづくよりきたるや 五五 これ木匠の子にあらずやその母ハマリアその兄弟ハヤコブヨセシモンユダにあらずや 五六 その妹たちハみなわれらとともにあるにあらずやされバこの人のすべてこれらのことハいづこよりきたりしや 五七 つひに厭てこれをすつ耶穌これらにいひけるハよげんじやハその故土そのいへのほかにしてたふとまれざることなし 五八 このひとびとが信ぜざるこころあるによりておほくのふしぎなるわざをそこにてなしたまはざりき

第十四章 そのころ分封のきみヘロデ耶穌のうはさをききて

二 そのしもべにいひけるハこれバプテスマのヨハネなり。かのしよりよみがへりたり。ゆゑにふしぎなるわざをおこなふなり

三 前にヘロデその兄弟ピリッポの妻ヘロデヤのことによりてヨハネをとらへしばりて獄につなぎたり 四 こハヨハネヘロデにこの女をめとるハよろしからずといひしによる 五 これヨハネをころさんとおもへど民これを預言者とするによりてそのたみをおそれたりしが 六 ヘロデ誕生の日をいはへるときヘロデヤのむすめその坐上にて舞をなしヘロデをよろこばせければ 七 いかなるものをも求まゝにまかせてあたへんとヘロデこれにちかひたり 八 むすめ

その母のそゝのかしによりバプテスマのヨハネの首を盤に
のせてこゝにたまはるべしといふ 九 王うれひけれどもすでに
誓たると席につらなるものゝためにあたふることを命
じ 十 すなはち人をつかはし獄においてヨハネのくびをき
らせ 十一 その首をぼんにのせてむすめにわたしければ女
がこれをその母にさゝげたり 十二 ヨハネのでしたちきた
りて屍をとりこれをはうむりゆきて耶蘇につぐ 十三 耶蘇こ
れをきゝて人をさけ舟にのりてそこをさりさびしきところ
にゆきたまひしが衆人きゝて歩行にてこれにしたがふ
り○ 十四 耶蘇いでゝおほくの人をみてこれをあはれみその
病るものをいやせり 十五 日くるゝときそのでしたちきたりてい
ひけるはこゝは寂莫ところにして時もはやすぎしむら〳〵
へゆきてみづから食をもとめさせんためにひとびとをさら
しめよ 十六 耶蘇これにいひけるは人々ゆくにおよばじな
んぢらこれに食をあたへよ 十七 こたへけるはこゝには
たゞ五の餅とふたつの魚あるのみ 十八 耶蘇のいひけるはそれ
をこゝにもちきたれ 十九 遂にひとびとに命じてくさにすわらしめ五
のバンと二のうをを取り天をあふぎて謝しバンをさきて
でしにあたふでしは衆人にあたへぬ 二十 皆くらひて
飽そのあまりたるくづをひろひしに十二の筐にみちたり

廿一 くらひしものハ婦と子どものほかおほよそ五千人なり
き○ 廿二 やがて耶穌ひと〴〵をかへさんとしてその門徒を志
ひて舟にのせむかふのきしへさきにわたらしむ 廿三 かくて
ひと〴〵をかへしければ祈禱せんとてひそかに山にのぼり
日くれてひとりそこにいませり 廿四 ふねハ海中にありて逆
風のためになミにたゞよはさる 廿五 夜の四時ごろ耶穌うミ
のうへをあゆミてかれらにいたりしに 廿六 門徒そのうミのうへ
をあゆむをミておどろきてハ變化のものなりといひ
ておそれさけびたり 廿七 耶穌やがてかれらにいひけるハ
こゝろやすかれ我なりおそるゝなかれと 廿八 ペテロこたへてい

ひけるハ主よもしなんぢならバわれに命じてミづをふミて
なんぢのもとにいたらしめよ 廿九 来れといひたまひければ
ペテロふねよりおりて耶穌のもとにいたらんとて浪のうへ
をあゆミたれど 三十 風のはげしきをミておそれしづミかゝ
りければ主よすくひたまへといふ 卅一 耶穌やがて手
をのべてとらへていひけるハ信仰のうすきものよな
んぞうたがふや 卅二 ともに舟にのりければ風しづまりぬ 卅三
ふねにをりしものちかよりてうやまひ拜しいひけるハまことに
なんぢハ神の子なり○ 卅四 つひにわたりてゲネサレの地
にいたり 卅五 そのところのひと〴〵耶穌をしりておほ

ねく四方に人をつかはしすべて病あるものをたづさへきた
らしむ 三六 たゞその衣のすそにさはらんことを耶蘇にねが
ひて押れるものはことごとくいやされたり

第十五章 ときにエルサレムの學者とパリサイのひと耶蘇にき
たりていひけるは 二 なんぢの門徒いにしへの人のつたへを
をかすはなにゆゑぞそは食するときにその手をあらはざ
ればなり 三 こたへてこれにいひけるはなんぢらはまた
なんぢらのつたへによりて神の誡ををかすはなにゆゑぞ 四
それ神いましめてなんぢの父母をうやまへまた父母をの
のしるものはかならずころさるべしとのたまへり 五 されどなん
ぢらはいひてすべて人ちゝはゝにむかひなんぢをやしな
ふべきものは禮物なりといひてその父母をうやまはざる
もよしとせり 六 かくてなんぢらは遺傳によりて神のおきてをむな
しくせり 七 偽善者よイザヤはよくなんぢらのことについてよげん
し 八 この民はくちにてわれにちかづき唇にてわれをうや
まへどもその心はわれにとほざかり 九 人のいましめを
をしへとなしてをしふればいたづらに我を拜むといへり 十 耶蘇衆
びとをよびてこれにいひけるはきゝてさとれ 十一 口にい
るものは人をけがさずくちよりいづるものはこれ人を
けがすなり 十二 門徒きたりて耶蘇にいひけるはパリサイの人

このことばをきゝていとひ棄るをしんぢたまふや 十三 こたへていひけるは わが天の父のうゑざるものはことごとくぬかるべし 十四 このひとたちをすておけ 瞽者の手びきする瞽者なり もし瞽者の手びきせばふたりとも溝におつべし 十五 ペテロ耶穌にこたへていひけるは このたとへをわれらにときたまへ 十六 耶穌いひけるは なんぢらもいまださとらざるか 十七 すべて口にいるものは腹をとほりてかはやにおつることをいまださとらざるか 十八 口よりいづるものはこゝろより出るゆゑこれぞ人をけがすものなり 十九 それこゝろよりいづるところの惡念 凶殺 姦淫 苟合 盗竊 妄證 誹謗 二十 これらは人をけがすものなり されどあらはざる手にてくらふは人をけがさず 二十一 耶穌こゝをさりてツロとシドンの地におもむきけるに 二十二 その地にをるカナンの婦いできよばはりいひけるは 主よダビデの裔よわれをあはれみたまへ わがむすめ鬼につかれていたくくるしめり 二十三 耶穌ひとこともこたへたまはざりしかば その門徒きたりこふていひけるは このをんなわれらのあとより喊叫ぶゆゑにこれをさらせたまへ 二十四 こたへていひけるは イスラエルの家のまよへる羊のほかにはつかはされざると 二十五 婦きたり拜していひけるは 主よわれをたすけたまへ 二十六 こたへけるは 兒女のパンをとりて犬になげあたふ

るハよろしからず 二七 をんないひけるハ主よしかりされど
いぬもその主人の膳よりおつるくづをくらふなり 二八 つひ
に耶穌こたへていひけるハをんなよなんぢの信仰ハおほい
なりねがひのごとくなんぢに成べしとこのときよりその女
いえたり○ 二九 耶穌ここをさりガリラヤのうみべにゆき山
にのぼりて坐せり 三十 おほくのひとびと跛者めしひ瘖者かたは
はおよびさまざまのやまひあるものをともなひきたりて耶穌
のあしもとにおきければ耶穌これをいやしぬ 三一 こ
ゝにおいておしハものいひ残疾ハいえあしなへハあゆみ
瞽者ハみえたるをひとびと見てあやしみイスラエルの神をあ
がめたり○ 三二 耶穌でしをよびていひけるハわれこの衆
人をあはれむ。かれらすでに三日われとともにをりてくら
ふものなし餓させてかへしやることをこのまずおそら
くハ途間にてたふれん 三三 そのでしこたへていひけるハ野に
てこのおほくの人にあくほどの餅をいづこよりえん
や 三四 耶穌これにいひけるハパンいくつあるやこたへけ
るハ七とすこしの魚ありと 三五 耶穌衆人に命じて地にざせ
らしめ 三六 七のパンとうををとりて謝しこれをさきてその門
徒にあたへしかばでしこれをひとびとにあたへて 三七 こ
とごとく飽たりあまりの屑をひろひしにななつのかごにみてり

三八 これを食ふものはをんなこどものほかに四千人ありき
三九 耶穌ひとびとをさらしめ舟にのりてマグダラのさかひに
いたれり

第十六章 一 パリサイとサドカイの人きたりて耶穌をこころみん
とて天のしるしを見せよといひければ 二 こたへて
いひけるはなんぢら暮には夕やけによりて晴るべし
といひ 三 朝にはあさやけまたくもりによりてけふは雨
ふるといふ偽善者よそらのけしきをわきまふることをしり
て時のしるしをわきまふることあたはざるか 四 姦惡なる世はしるし
をもとむるとも預言者ヨナの休徵のほかしるしを
あたへらるることなしとてかれらをすておきてさりぬ ○ 五 そのでし
しむかふの岸にいたりしに餅をたづさふることをわすれ
たり 六 耶穌かれらにいひけるはつつしみてパリサイと
サドカイの人のパンだねをつつしめよ 七 門徒たがひに論
じていひけるはこれパンをたづさへざりしゆゑなるべし 八
耶穌これをしりていひけるは信仰うすきものよなんぢた
ちは餅をたづさへざりしことをろんずるや 九 いまださ
とらざるか五千人はいつつのパンをわかちてのこりしくづいくか
ごひろひしや 十 また四千人はななつのパンをわかちてのこりし
くづいくかごひろひしやなんぢらこれをおぼえざるか 十一

パリサイとサドカイの人のパンだねをつゝしめといひし餅につ
きていへるにあらざるをなんぞさとらざる 十二 こゝにおい
て門徒そのパンだねにあらでパリサイとサドカイのひと
のをしへを謹防といへるなるをさとれり ○ 十三 耶穌ピリツポ
のカイザリヤのちほうにいたりしときそのでしにとふていひ
けるハひと〴〵ハ人の子をたれといふや 十四 でしこたへていひける
ハある人ハバプテスマのヨハネなりとあるひとハエリヤあるひとハ
エレミヤまたハ預言者のひとりなりといへり 十五 かれらにいひ
けるハなんぢらハわれをたれといふや 十六 シモンペテロ
こたへけるハなんぢハキリスト活神の子なり 十七 耶穌こたへ

てかれにいひけるハヨナの子シモンなんぢハさいはひな
りこれハ血肉なんぢにあらはせるにあらず天にましますわが
父なり 十八 われもまたなんぢにつげんなんぢハペテロなりわ
が教會をこのいしのうへにたてん陰府の門ハこれにか
つべからず 十九 まさにてんごくの鑰をなんぢにあたへん
なんぢおよそ地において繋ところハ天においてもつなぎなんぢ
が地において釋ところハてんにおいてもとくべし 二十 つひに
その門徒をいましめけるハわれをキリストと人につぐる
ことなかれ ○ 二十一 このときより耶穌そのでしにおのれの
エルサレムにゆきて長老さいしのをさ學者たちよりおほく

のくるしみをうけかつころされ第三日によみがへることゝ
を示しはじむ 二二 ペテロ耶穌をひきとゞめて主よしかあらざれこの
ことなんぢにきたるまじといひければ 二三 耶穌ふりかへり
てペテロにいひたまひけるはサタンよわがうしろにしりぞ
けなんぢはわがために礙なりなんぢは神のことをおも
はずしてたゞ人のことをおもへり 二四 このとき耶穌その
でしたちにいひけるはもしわれにしたがはんとおもはゞおのれ
をすてゝその十字架を負てわれにしたがふべし 二五 それ
いのちを保全せんとおもふものはこれをうしなひわがため
にその生命をうしなふものはこれをうべければなり 二六 も
し人せかいぢゆうをまうくるともそのいのちをうしなはゞな
んの益あらんやまた人なにをもてその生命にかへんや 二七
それ人の子はちゝの榮光をもてそのつかひたちとともに
きたらんそのときおのおのの行によりてむくゆべし 二八 まこと
になんぢらにつげん人の子その國をもてきたるをみる
まではしなざるものこのうちにたてるものあるべし
第十七章 六日のゝち耶穌ペテロヤコブその兄弟ヨハネをと
もなひ人をさけてたかき山にのぼりたまひしが 二 かれら
のまへにてそのさまかはりそのかほ日のごとくかゞや
きその衣はしろくひかりあり 三 モーセとエリアあらはれて

耶穌とかたりあひぬ 四 ペテロこたへて耶穌にいひけるは
主よわれらこゝにをるハ善しみこゝろにかなはゞこゝ
に三の廬をつくらせたまへ一ハ主のため一ハモーセ
のため一ハエリアのためにせん 五 かくいへるときかゞや
ける雲かれらをおほふ聲くもよりいでていひけるハこれ
わがこゝろにかなふわが愛子なりなんぢらこれにきくべ
し 六 門徒らこれをききておほいに懼れたふれふしたりし 七
耶穌きたりて彼らに手をつけ起よおそるることなかれとい
ひければ 八 その目をあげしにただ耶穌のほかひとりもみ
ざりき○ 九 山をくだるときに耶穌かれらに命じて人の

子のよみがへるまではなんぢらの見しことを人につぐべ
からずといへり 十 その弟子たちとふていひけるハさらバエリア
はさきにきたるべしと學者のいへるハなにゆゑぞや 十一 耶穌こた
へていひけるハ實にエリアハきたりて萬事をあらたむべ
し 十二 されどわれなんぢらにつげんエリアハすでにきたれり
しかるに人これをしらずして任意よりこれをあしらへり。かくの
ごとく人の子もまたかれらよりくるしめらるべし 十三 こ
こにおいて門徒バプテスマのヨハネをさしていひたまへる
とさとれり○ 十四 かれらおほくの人のをるところにきたり
しにあるひと耶穌のもとにきたり曲跪 十五 いひけるハ主よ

わが子をあはれみたまへ 癲癇にてなやみ しばしば火にたふれ しばしば水に
たふるることしばしばなり 十六 これをなんぢの門徒につれ
ゆきたれども いやすことを得ざりき 十七 耶蘇こたへていひけ
るは ああ信なきまがれる世なるかな われいつまでなんぢ
らとともにをらんや われいつまでなんぢらを忍んや これを
わがもとにつれきたれ 十八 つひに耶蘇鬼をいましめた
まへば鬼いでて その子このときよりいえたり 十九 そのとき
でし ひそかに耶蘇にきたりいひけるは われらこれをおひ
いだすことあたはざりしはなにゆゑぞ 二十 耶蘇こたへていひ
けるは なんぢら信なきがゆゑなり まことになんぢ

らにつげん もし芥種のごとき信あらば この山にここより
かしこにうつれといふともうつらん またなんぢ
らにあたはざることなかるべし 二十一 されどこのたぐひは祈
祷と断食にあらざれば いづることなし ○ 二十二 ガリラヤを周
流するとき耶蘇かれらにいひけるは 人の子ひとの手にわたさ
れ 二十三 かれらころされて第三日によみがへるべし 門徒これをきき
てはなはだうれひけり ○ 二十四 かれらカペナウンにきたる
とき税金をあつむるものどもペテロにきたりていひける
は なんぢらの師は税金をいださざるか 二十五 しかりと
いひて ペテロいへにいりしとき耶蘇まづこれにいひける

さシモンなんぢハいかにおもふや世界の王たちハ運上お
よび人税をたれよりとるぞわが子よりかほかのもの
よりか 二六 ペテロこれにいひけるハほかの人よりとるなり
耶穌これにいひけるハさらバ子ハゆるさるべかし 二七 さ
れどわれらがかれらをつまづかせざるためなんぢ海にゆきて釣
をたれよはじめにつる魚をとりてその口をひらかバ金ひ
とつをうべしそれをとりてわれとなんぢのためにかれら
に納よ

第十八章

一 そのときでし耶穌にきたりていひけるハ天國にお
いて大なるものハたれぞや 二 耶穌をさな子をよびよせてかれら
のなかにたてゝ 三 いひけるハまことになんぢらに告ん
もしあらたまりて孩提のごとくならずバてんごくにいる
ことをえじ 四 されバおほよそこの孩提のごとくみづか
らへりくだるものハこれ天國においてもつとも大なるものな
り 五 またわが名のためにかくのごときひとりの孩提を
接るものハわれを接るなり 六 されどわれを信ずるこの
小子のひとりをつまづかするものハ磨石をそのくびにか
けられて海のふかきにしづめられんことなほ益あるべし
七 この世ハわざはひなるかなそハつまづかせることあるを
もてなり礙ハかならずきたらん。されどつまづきをき

たらんものハ禍なるかな 八 もしなんぢの手なんぢの足なんぢを
つまづかさバきりてこれをすてよ両手両足ありて
つきざる火になげいれらるゝよりハ跛またハ手なくして
生にいるハよき事なり 九 もしなんぢの眼なんぢをつまづかさ
バぬきいだしてこれをすてよ両眼ありて地ごくの火に
なげいれらるゝより一眼にていのちにいるハよき事なり
◎十 なんぢらこのちひさきものゝひとりをもあなどりて
軽視ることなかれなんぢらにつげん彼らの天使ハ
天にありて天にいます我父のかほをつねに見るなり
十一 それ人の子ハほろびたるものをすくはんためにきたれり

十二 なんぢらいかにおもふや人もし百匹の羊あらん
にその一ぴきまよひたらバ九十九を山におきゆきて其まよひし
ひとつをたづねざらんや 十三 もし尋てこれをえバまことに
なんぢらにつげん其まよはざる九十九のものよりもなを
ほその一をよろこぶべし 十四 かくのごとくこのちひさきもの
のひとりのほろぶるハ天にいます汝らの父のこゝろに
あらず 十五 もし兄弟なんぢに罪を犯さバゆきて其
ときにゆきていさめよもしなんぢのことをきかバその
兄弟をえたるべし 十六 もしきかざれバ両三人の口によりてあらゆ
ることをすべてのことをさだめんためなんぢハひとりふたりを

ともなひゆけ　十七　もしつきてきても　きかずんば　教會につげよ。
もし　けうくわいにきかずんば　これを異邦人のごとく税吏のごと
きものとすべし　十八　まことに　なんぢらにつげん　なんぢらがつ
なぐことを地においてつなぐことは　天においてもつなぐべし。な
んぢらが地においてときはなすことは　天においてもときはなさるべし　十九　また
まことになんぢらにつげん　なんぢらのうち二人のもの
地においてこゝろをあはせ　なにごとにてもねがはゞ　天に
いますわが父は　なんぢらのためにこれを成たまふべし　二十　そ
はわが名のために二三人のあつまるところには
そのうちにあればなり　○　二十一　そのときペテロ耶穌にきたり

ていひけるは　主よ　いくたびまでわが兄弟のわれにつみを
をかせるをゆるすべきや　七たびまでか　二十二　耶穌これにいひ
けるは　なんぢに七次とはいはず　七たびを七十倍せよ　二十三
このゆゑに天國は王その家來と會計をなさんとする
がごとし　二十四　すでにはじめしとき　千萬金のおひめある
ものを王にひききたりしに　二十五　つぐのふべきものなかり
しかば　主命じて　その身その妻子およびもちものをみな
うりてつぐのはしめんとせり　二十六　その臣ひれふしていひけるは
わがおひめを寛したまへ　ことごとくつぐのふべし　二十七　そ
の家來の主あはれみてゆるし　そのおひめを釋しその

たり 廿八 その臣いでておのれより銀一百のひきおひしたる
友にあひければこれをとらへ喉をとりひきおひをかへせ
といふ 廿九 その友はふしてねがひいひけるはわが
ために寛したまへさらばつくのふべし 三十 されどこれをうけ
がはずしてゆきその負債をつくのふまでこれを獄にいれ
ぬ 三十一 ほかの友そのなせるところを見ていたくうれひ往
てこのことをことごとくその主につげしらしければ主その臣をよびて
いひけるはあしき臣よなんぢわれに求しによりてわれそ
のひきおひをことごとく免したりなんぢをあはれみし
しごとくなんぢもまたその友をあはれむべきにあらずや 三十四 その

の主いかりてひきおひをことごとく償までこれを獄吏にわたせ
り 三十五 もしおのおのその心より兄弟をゆるさずばわが天の父
もまたなんぢらにかくのごとくなすべし

第十九章

耶穌これらのことをのべをはりしときガリラヤをさり
てヨルダンのむかふユダヤの境にいたりけるに 二 おほくの
人々これにしたがひければそこにてかれらの病を醫したまへり
三 パリサイの人きたりて耶穌をこゝろみいひけるは人
なにの故にてもその妻をいだすはよきか 四 こたへて
いひけるはいまだよまざるか元始に人をつくりたまひしもの
はじめより男女につくれり 五 この故に人その父母をはなれて

その妻にあひ二人のもの一體となるなりといへるをいま
だよみたまはざるか 六 されバすでに二にハあらで一體なり神のあ
はせたまへるものハ人これをはなすべからず 七 耶蘇にい
ひけるハさらバ離縁状をわたして妻をいだせとモーセが
命ぜしハなにゆゑぞや 八 こたへていひけるハモーセハなんぢ
らの心のつれなきによりて妻をいだすことをゆるしたる
なりされど元始ハかくあらざりき 九 われなんぢらにつげ
んもし淫事のゆゑならでその妻をいだし他の婦をめと
るものハ姦淫をおかすなりまたいだされたる婦をめと
るものもまたかんいんを行なり 十 でしたち耶蘇にいひけるハ

もし人つまにおいてかくのごとくハ娶ざるにしかずと 十一 この
ことばハいひけるハこのことばハ人みなうけいるることあ
たはずたゞ稟賦たるものゝみこれをなしうべし 十二 それ母
のはらよりうまれつきたる寺人ありまた人にせられたる
寺人ありまた天國のためにみづからなりたる寺人ありこれを
うけいるゝことをうるものハ納べし○ 十三 そのときひと
びと耶蘇の手をつけていのらんことを求ておさなごをつれ
きたりけれバ門徒これをとゞめたり 十四 耶蘇いひけ
るハ孩提をゆるせわれにきたることをいましむるなかれ
天國ハかゝるものゝかくのごときものなり 十五 すなはち[illegible]

らは手をつけてこゝをさりぬ○十六 ある人きたりてこれにいひ
けるは善師よわれかぎりなき生をえんがためにはなにの
よきことをなすべきぞ 十七 これにいひけるはなにゆゑにわれを
よきといふや ひとりのほかは善ものはなし すなはち神
なり さりながら いのちにいらんと欲せば誡をまもるべし 十八 かの
人これにいひけるは何ぞや 耶穌いひけるは ころすなかれ 姦淫をす
るなかれ ぬすむなかれ いつはりの證をたつるなかれ 十九 な
んぢの父と母とをうやまへ またおのれのごとくなんぢの隣を
あいすべし 二十 少者これにいひけるは これらはわれいとけ
なきよりまもれり なほわれの虧たるところはなにな
るや 二十一 耶穌これにいひけるは 完全からんとおもはゞ
往てなんぢが所有をうりてまづしきものに施せば天
において財あらん 然して来りわれにしたがへ 二十二 わか
きものこのことばをきゝてうれひさりぬ これの産業おほ
いなりければなり○二十三 耶穌その弟子にいひけるはまことに
なんぢらにつげん 富るものは天國にいることかたし 二十四 また
なんぢらにつげん とめるものゝ神の國にいるよりは駱
駝の針のあなをとほるはなほやすし 二十五 門徒これをきゝて
いたくおどろきいひけるは さらば誰かすくひをうくべき
や 二十六 耶穌これをみていひけるは これ人にはあたはざる

ところありされど神にハあたはざるところなし ○ 二七 この
ときペテロこたへて耶穌にいひけるハわれら一切をすてゝ
なんぢにしたがへりされバなにを得べきや 二八 耶穌これ
らにいひけるハまことになんぢらにつげんわれにし
たがへるなんぢらハ世あらたまり人の子その栄の位にざ
するときなんぢらも十二の位にざしてイスラエルの十二の
支派をさばくべし 二九 またわが名のためにハ家宅あるひハ
兄弟あるひハ姉妹あるひハ父あるひハ母あるひハ妻ある
ひハ子あるひハ田畴をすつるものハ百倍をうけついにかぎ
りなき生をつがん 三十 おほくの先なるものハおくになり後
なるものハいやさきになるべし

第二十章 それ天國ハあさはやくいでゝ葡萄園にはたらくも
のをやとふ主人のごとし 二 はたらくものにハ一日に銀一
枚をあたへんと約束をなしそのものをぶだうぞのにつか
はせり 三 また九時ごろいでゝちまたにむなしく立るものを
みて 四 なんぢらもぶだうぞのにゆけ相當のあたひを
あたへんとそのものにいひけれバかれらもゆけり 五 また十
二時と三時ごろいでゝまへのごとくなせり 六 五時ごろい
でゝまたほかの立るものにあひていひけるハなにゆゑ終
日こゝにむなしくたつや 七 これにこたへていひけるハた

われらをやとふものの無によりて あそびゐるなりといひけるは なんぢらも葡萄園にゆけ さうたうの價をうくべしと 八 日くるゝとき ぶだうぞののあるじその家宰にいひけるは はたらきたるものどもをよびて 後にやとひつるものをはじめて 先のものにまであたへよと 九 五時ごろにやとはれしものどもきたりて 銀一枚づゝをうけたり 十 さきのものどもきたりて おほくうくるならんとおもひしに また銀一枚づゝをうく 十一 これをうけて主人をうらみつぶやきけるは 十二 この後至者のはたらきたるは一時なるに 終日くるしみと餒あつさにあひたるわれらとひとしくこれをなせりと 十三 あるじそのひとりにこたへていひけるは 友よわれなんぢに不義をせず なんぢと銀一枚のやくそくをなしたるにあらずや 十四 なんぢのものをとりてゆけ われこゝろざし此のちのものにもなんぢのごとくあたふべし 十五 わがもののをわがおもひのまゝにせんはよろしからずや わが善によりてなんぢの目あしきか 十六 かくのごとく後のものはさきになり 先のものはあとになるべし そはまねかるゝものはおほけれども えらばるゝものはすくなし ○ 十七 耶穌エルサレムにのぼるとき 途間にて衆をはなれ 十二門徒をともなひてこれにいひけるは 十八 みよわれらエルサレムにのぼり

人の子ハ祭司のをさと學者たちにわたされん彼等これを
死罪にさだめ先まづ凌辱むちうち十字架につけんために
異邦人にわたすべし然して第三日によみがへるべし ○二十 その
ときゼベダイの子たちの母その子とゝもに耶蘇にきたり拝
してそのもとにもとむることありければ 二十一 これにいひけるハ
なにをねがふか かれ耶蘇にいひけるハこのふたりのわが子を
なんぢの國において一人ハなんぢの右ひとりハなんぢの
左にざせしめたまへと 二十二 耶蘇こたへていひけるハなんぢ
らハ求るところをしらざるなり わがのまんとする杯を
のみわがうけんとするバプテスマをうけうるやかれ

らいひけるハよくなすべし 二十三 耶蘇これにいひけるハまこと
になんぢらハわがさかづきをのみまたわがうくるバプ
テスマをうくべし されどわが右左にざすることハわが賜
べきにあらず ただわが父によりてそなへられたるもののみあづく
るべし 二十四 十人の弟子これをきゝてふたりの兄弟をいき
どほれり 二十五 耶蘇これをよびていひけるハ異邦の領主ハ
その民をつかさどり大なるものどもハこれらのうへに權を
とることなんぢらが知ところなり 二十六 されどなんぢらの
うちにてハ然るべからず なんぢらのうち大ならんと欲を
ものハなんぢらにつかふるものとなるべし 二十七 またなん

んぢらのうち首たらんとおもふものハなんぢらのしもべ
となるべし 二八 かくのごとく人の子のきたるも人をつかふ
ためならずかへつて人につかへまたおほくの人に
かはりて生命をあたへその贖となさんためなり ○ 二九 かれ
らエリコをいでしときおほくのひとびと耶穌にしたがへり
三十 ふたりの瞽者みちのかたはらにすわりゐしが耶穌の
すぐるときゝてさけびいひけるハダビデの子主よわれら
をあはれみたまへ 三一 衆これをいましめてもだせしむれども
愈さけびいひけるハダビデの子主よわれらをあはれみ
たまへ 三二 耶穌たちとまりてこれをよびいひけるハなんぢ
らハ我に何をせられんことをねがふや 三三 耶穌にいひけるハ
主よわれらが目のひらかんことをねがふ 三四 耶穌あはれみて
その目に手をつけければたゞちに見ることを得耶穌にしたが
ひけり

第二十一章 このとき橄欖山のベツパゲにいたりエルサレムにちかづ
けるとき耶穌ふたりのでしをつかはさんとして 二 これに
いひけるハなんぢら對のむらにゆけやがてつなぎたる
驢馬その子とともにあるを見ん それをときてわれに
ひききたれ 三 もしなんぢらに何とかいふものあらバ主の用
なりといへ さらバたゞちにこれをつかはすべし 四 預言者

のことなるは視よなんぢの王は柔和にして驢馬にのりもちろ
ばの子にのりなんぢにきたるとシオンの女につげよ 五 と
いへるにかなはせんためにこのことなれるなり 六 門徒ゆきて
耶蘇のめいぜしごとくなし 七 驢馬とその子をひききたり
おのれの衣をそのうへにおきければ耶蘇これにのれり 八
衆おほくはその衣を途にしきあるひは樹枝をきりて
みちにしきぬ 九 その前にゆき後にしたがふものはよばはりい
ひけるはダビデの子ホザナよ主の名によりてきたるもの
はさいはひなり至上ところにはホザナよ 〇 十 耶蘇エルサレム
にいりたまひしときみやこあまねくさわぎていひけるはこれ

たれぞや 十一 衆はいひけるはこれガリラヤのナザレよりいでた
るよげんしや耶蘇なり 〇 十二 耶蘇神の宮にいりてその
うちなるすべての賣買するものをおひいだし兌銀者のだ
い鴿をうるものゝこしかけをたふし 十三 これにいひける
はわが殿は祈禱の殿ととなへらるべしとしるさる。しか
るになんぢらこれをぬすびとの巣となせり 十四 瞽者あしな
へのひとびと殿にいりて耶蘇にきたりければこれをいやし
ぬ 十五 さいしのをさと學者たちそのなしたまへる奇事をみ
またこどもらの宮にてよばはりダビデの子ホザナよと
いふをききていかりをふくみ 十六 耶蘇にいひけるはこの童子

がいふことをきゝしや耶穌こたへていひけるはしかり嬰兒ちのみ子のくちに讃美をそなへたりとあるをいまだよまざるか 十七 遂にかれらをはなれみやこをいでゝベタニヤにゆきそこにやどれり○十八 翌朝みやこへかへるとき飢ゑてみちのほとりにある十九 一の無花果のきをみてそのところにきたりしに葉のほかになにもみざりしかバいまよりのちいつまでも果をむすぶこともえざれといひたまひければ無花果たちどころにかれぬ 二十 門徒これをみてあやしみいひけるハいかにしてこのきのかくすみやかにかれしや 二十一 耶穌こたへていひけるハまことに

なんぢらもし信仰ありてうたがはずバたゞこの無花果におけるがごときのみならずこの山に命じてうつされて海にいれといふともまたなるべし 二十二 なんぢらおほよそ信じていのりねがふところことごとく得べし 二十三 いえす殿にいりてをしへたるとき祭司のをさおよび民の長老だちきたりていひけるハなんぢの權威をもてこのことをなすや誰このけんゐをなんぢにあたへしや 二十四 耶穌こたへてのたまひけるハわれもまた一言なんぢらにとはんなんぢらわれにそのことをつげなバわれもまた何のけんゐをもてこれを行ふかをなんぢらにいはん 二十五 ヨハネのバプテスマをいづこ

よりぞ天よりか人よりかこの事をたがひに論じいひけるは もし天よりといはゞさらばなにゆゑ信ぜざるかといはん
二六 もし人よりといはゞわれら民をおそる それはこの民ヨハネを預言者とすればなり 二七 つひにこたへてしらずといふ
耶蘇かれらにいひけるは我も何の權威をもてこの事をなすかをなんぢらにつげじ 二八 なんぢらいかにおもふや ある人ふたりの子ありしが長子にきたりていひけるは子よけふわが葡萄園にゆきてはたらけ 二九 こたへていなといひしがのち悔てゆきたり 三十 また次子にきたりてまへのごとくいひければこたへて君よまゐらんといひしがつひにゆかず

ざりき 三一 このふたりのものいづれか父のむねにかなひしかと かれらいひけるは長子なり 耶蘇かれらにいひけるはまことになんぢらにつげん 税吏娼妓はなんぢらよりさきに神のくにゝいるべし 三二 それヨハネたゞしき道をもてきたりしになんぢらこれを信ぜず みつぎとりあそびめはこれを信じたり なんぢらこれを見てなほ悔あらためずしてこれを信ぜざりき ○ 三三 また一のたとへをきけ ある家のあるじぶだうぞのをつくり籬をめぐらしそのなかに酒榨をほり樓をたて農夫にかしてほかのくにへゆきしが 三四 果期ちかづきければその果をとらんために僕をのうふのもとに

はつかはせり 三五 農夫どもはその僕たちをとらへ一人を
むちうち一人をころし一人をいしにてうてり 三六 またほか
の僕をまへよりもおほくつかはしけるにこれにもまへの
ごとくなせり 三七 わが子はうやまふならんといひて終にそ
の子をつかはせしに 三八 のうふどもその子をみてたがひに
いひけるはこれは嗣子なりいでころしてその產業を
まとるべしとて 三九 すなはちこれをとらへ葡萄園よりおひい
だしてころせり 四十 さればぶだうぞのの主きたらんとき
はこの農夫はなにをなすべきぞ 四一 かれら耶蘇にいひける
はかれらの惡人をいたくうちほろぼし期におよびてその

果をさゝむるほかの農夫にぶだうぞのをあたふべ
し 四二 耶蘇かれらにいひけるは聖書に工匠のすてたる石は
いへのすみの首石となれりこれ主のなしたまふことにて
してわれらの目にはあやしとするところなりとかゝれし
をいまだよまざるや 四三 この故にわれなんぢらにつげん神
の國をなんぢらよりうばひその果をむすぶ民にあたへら
るべし 四四 この石のうへにおつるものは壞この石ひとにお
つればそのものをくだくべし 四五 祭司のをさたちおよび
パリサイの人らそのたとへをきゝおのれらをさしていへる
をしりて 四六 耶蘇をとらへんとおもひけれどたゞ民を

おそれたり それハ ひとびと かれを預言者とおもへバなり
第廿二章 耶穌こたへてまた譬をかたりけるハ 二 天
國ハある王その子のために婚筵をまうくるがごとし 三 こ
んえんに請おけるものをむかへんために僕たちをつかハ
せしかどきたることをこのまず 四 またほかのしも
べをつかハしていひけるハ わが筵すでにそなへた
り わが牛および肥畜をもほふりてことごとくそなはりたれバ
婚筵にきたりたまへとまねきたるものにいへ 五 されどもかれ
らうけひかずしてさりぬ その一人ハおのれの畑にゆきひ
とりハおのれの貿易にゆけり 六 ほかのものどもハその僕
をとらへはづかしめてころせり 七 王これをきゝていかり
軍勢をつかハしてそのころせるものどもをほろぼしまたその
邑をやきたり 八 こゝにおいてその僕どもにいひけるハ こ
んえんすでにそなはれども請たるものハ客となるにたら
ざるものなれバ 九 衢にゆきてあふほどのものを婚筵にま
ねけ 十 そのしもべ途にいでてよきものをあしきものをと
もあふほどのものをことごとくあつめければこんえんのき
やく充満せり 十一 王客をみんとてきたりけるにひと
りの禮服をきざるものあるをみて 十二 これにいひけるハ友
よいかなれバれいふくをきずしてこゝにきたるやと。その人黙

然たるを 十三 つひに王しもべにいひけるハこの者の手足をしば
りてそとの幽暗(くらき)になげいだせ そこにてこの者しきりになき切齒(はがみ)
することあらん 十四 それよばるゝものハおほしといへど
えらまるゝものハすくなし ○ 十五 このときパリサイの人い
でゝいかにしてこの者をいひあやまらせんとあひはかり
十六 その徒弟(でし)とヘロデの黨(たう)とをつかはしていはせけるハ師よ
なんぢハ眞(まこと)あるものなり。まことをもて神のみちををしふ
また誰(たれ)をもはゞからざるこゝろをもちていまするそハ貌(かほ)によ
りて人をとらざればなり 十七 されバ人税(にんぜい)をカイザルにをさ
むるハよきやあしきや なんぢいかにおもふやわれらにつげたまつ

けよ 十八 耶蘇その惡(あく)をしりていひけるハ偽善者(ぎぜんしや)よなんぞわ
れをこゝろむるや 十九 にんぜいの銀錢(ぎんせん)をわれにみせよ かれ
らデナリ一(ひとつ)を耶蘇にもちきたりしに 二十 耶蘇かれらにいひけるハこ
の像(かたち)と號(な)ハたれのぞ 二十一 こたへてカイザルなりといふ こゝにお
いて耶蘇かれらにいひけるハさらバカイザルのものハカイザル
にかへし神のものハ神にかへすべし 二十二 かれらこれをき
きて奇(あやし)として耶蘇をさりゆけり ○ 二十三 復生(よみがへり)なしといひなせ
るサドカイの人この日いゑすにきたりとふて 二十四 いひけるハ
師よモーセのいへるに人もし子なくしてしなバ兄弟(きやうだい)その妻(つま)
をめとりて子をうみきやうだいのあとを嗣(つぐ)べしと 二十五 こ

こゝにわれらの中にきやうだい七人ありしが兄めとりて死
こなきゆゑにその妻をおとうとにのこせり 二六 その二もそ
の三もその七まで然り 二七 のちつひに婦もまたしにたり
二八 よみがへるときはこのもの七人のうち誰のつまとなる
べきそのゆゑはみなこれを娶しものなればなり 二九 耶蘇こたへ
てこれにいひけるはなんぢら聖書と神のちからをも
しらざるによりてあやまれり 三十 それよみがへるときはめ
とらず嫁がずてんにある神のつかひたちのごとし 三一 死しも
のゝよみがへることにつきてはなんぢらに神のつげたま
ひし言に 三二 われはアブラハムの神イサクのかみヤコブのかみ
なりとあるをいまだよまざるや。それ神は死しものゝ
神にあらず生るものゝ神なり 三三 ひとびとこれをきゝてその
訓をおどろけり○ 三四 耶蘇サドカイの人をして口をふさがし
めたりときゝてパリサイの人ひとつところにあつまりける
が 三五 その中なるひとりの教法師いゑすをこゝろみんため
にとふていひけるは 三六 師よおきてのうちいづれの誡がおほ
いなる 三七 耶蘇こたへけるはなんぢ心をつくし精神をつ
くし意をつくし主なるなんぢの神をあいすべし 三八 これ第一
にして大なるいましめなり 三九 第二もまたこれにおなじお
のれのごとくなんぢの隣をあいすべし 四〇 すべての律法と

預言者はこの二つのいましめによれり○四一 パリサイの
人のあつまれるとき耶穌これにとふていひけるは 四二 な
んぢらキリストについていかにおもふや これたれの子なる
や。かれら耶穌にいひけるは ダビデの子なり 四三 かれらにいひ
ひけるは さらばダビデ聖靈に感じてなにゆゑこれを主と
となへしや ダビデいふ 四四 主わが主にいひけるは われなんぢ
の敵をなんぢの足のもとにおくまでは わが手の右にざせ
よと。さればダビデすでにこれを主ととなへたれば いかで
その子ならんや 四六 たれも一言にてもこたふることあたはざりし
この日より敢てまたとふものなかりき

第廿三章 そのとき耶穌ひとびとと門徒とによびつけていひけるは
二 學者とパリサイのひとはモーセの位にざせり 三 ゆゑになんぢらすべ
てかれらがなんぢらにいふところを守ておこなふべし さ
れどかれらが行ところをなすことなかれ ゆゑはかれらはい
ふのみにしておこなはざればなり 四 またかれらは重かつ
負がたき荷をくくりて人の肩におき おのれはひとつの
指をもてこれをうごかすことをせず 五 このかれらの行ひ
はすべて人にみられんがためにするなり。その佩經をひろ
くしその衣のすそをおほいにし 六 また筵席のうはざ會
堂のうはざと 市上のあいさつ人々よりラビ ラビととなへらるゝ

られんことをこのむ 八 なんぢらはラビのとなへをうくる
ことなかれそはなんぢらの師はひとりすなはちキリスト
なりなんぢらはみな兄弟なり 九 また地にあるものを父と
よぶなかれそはなんぢらの父はひとりすなはち天にま
いますものなり 十 また導師のとなへをうくることなかれそは
なんぢらのだうしはひとり卽ちキリストなり 十一 なんぢらの
うち大なるものはなんぢらのしもべとなるべし 十二 おほよ
そみづからを高するものはひくゝせられみづからを卑す
るものはたかくせられん ○ 十三 あゝなんぢらわざはひなる
かな偽善なる學者とパリサイの人よそはなんぢら天國を人

のまへにとぢてみづからいらずいらんとするものゝい
るをもゆるさゞればなり 十四 噫なんぢらわざはひなるかな
偽善なる學者とパリサイの人よそはなんぢら嫠婦の家
をのみいつはりてながき祈をなすことによりてなんぢら
めらるゝも重刑をうくべければなり 十五 あゝ禍なるかなぎぜ
んなる學者とパリサイのひとよそはなんぢらあまねく水陸
をへめぐり一人をもおのが宗旨にひきいれんとてすでに
ひきいれゝばこれをなんぢらよりもなほ倍したる地獄の
子となせり 十六 あゝなんぢらわざはひなるかな瞽者なるて
びきよなんぢらはいふ人もし殿をさしてちかふとも事な

殿のこがねをさしてちかふものはそむくべからずと 十七 おろかにしてめしひなるものよ金とこがねをきよからしむる殿といづれかたふとき 十八 またいふ人もしまつりの壇をさしてちかふはことなし そのうへの供物をさしてちかはゞそむくべからずと 十九 愚にしてめしひなるものよ そなへものと供物をきよからしむる祭壇といづれかたふとき 廿 それゆゑまつりのだんをさして誓ものはまつりの壇およびそのうへのすべてのものをさしてちかふなり 廿一 また殿をさしてちかふものは殿およびそのうちにいますものをさしてちかふなり 廿二 また天をさしてちかふものは神の寶座およびそのうへにざするものをさしてちかふなり ○廿三 あゝなんぢらわざはひなるかな偽善なる學者とパリサイのひとよ なんぢら薄荷 茴香 馬芹の十分の一をとりをさめておきてのもつともおもき義と仁と信とをなんぢらは廢これおこなふべきものなり これもまたすつべからざるものなり 廿四 めしひなるてびきよ なんぢらは蠓をこしいだして駱駝をのむものなり 廿五 あゝわざはひなるかな偽善なるがくしやとパリサイのひとよ なんぢらはさかづきと盤のそとをきよくしてうちは貪欲と淫欲とをもてみてり 廿六 めしひなるパリサイの人よ まづ杯とさらのうちをきよくせ

よくあらへバその外面もまたきよくなるべし○廿七 あゝなんぢら
禍なるかなぎぜんなる學者とパリサイのひとよなんぢらハ
しろくぬりたる墳墓ににたりそとハうるはしくみゆれど
も内ハ骸骨とさまざまの汚穢にてみつ 廿八 かくのごとくなん
ぢらもまた外ハたゞしく人にみゆれども内ハ偽善と不
法にてみつ 廿九 あゝなんぢらわざはひなるかなぎぜんなる
學者とパリサイのひとよなんぢらよげんしやの墓をたて義
人の碑をかざり 三十 またいふ我らもし祖先のときにあ
らばよげんしやの血をながすのともとならざりしならんと 三一
されバなんぢらハ預言者をころせしものゝ裔なることを
みづから證す 三二 なんぢらせんぞの量をみたせ 三三 へびまむ
しのたぐひよ。なんぢらいかでか地獄のけいばつをまぬかれ
んや 三四 このゆゑにわれなんぢらに預言者と智者と學者とを
つかはさんにあるひハこれをころしまた十字架につけあ
るひハその會堂にてこれをむちうちあるひハ邑より邑へ
おひつるしめん 三五 それハ義なるアバルの血よりみやとまつり
の壇のあひだにてなんぢらがころせしバラキアの子ザカリア
の血にいたるまで地にながしたる義人の血ハことごとくなん
ぢらにむくいきたらんがためなり 三六 われまことになんぢ
らにつげん。このことみなこの代にむくいきたるべし 三七 あゝ

エルサレムよエルサレムよよげんしやをころしなんぢにつかハ
さるゝものを石にてうつものよ母雞の雛をつばさのし
たにあつむるごとくわれなんぢの子どもをあつめんとせ
しこといくたびぞやされどなんぢらハこのまざりき 三八 視
よなんぢらの家ハあれちとなりてのこされん 三九 われなん
ぢらにつげん主の名によりてきたるものハ福なりとなん
ぢらのいはんときいたるまでハ今よりわれをみざるべし

第廿四章

耶蘇みやよりいでゆけるにそのでしきたりて殿宇を
かれにみせんとしたりしに 二 耶蘇かれらにいひけるハなん
ぢらこれをことごとく見ざるかわれまことになんぢらにつ
げんこのところに一のいしも石のうへにくづされずして
ハのこらじ 三 耶蘇かんらんさんに坐したまへるとき門徒
ひそかにきたりていひけるハいつこのことある
やまたなんぢのきたる兆と世のをはりのしるしハいかな
るぞやわれらにつげたまへ 四 耶蘇こたへてかれらにいひ
けるハなんぢら人にあざむかれざるやう慎よ 五 それおほ
くの人わが名をおかしきたりわれハキリストなりといひて
おほくの人をあざむくべし 六 またなんぢら戦といくさの
風聲をきかんされどつゝしみておそるゝことなかれこれ
らのことハかならずあるべきなりされども末期ハいまだいた

らんため民おこりてたみをせめ國ハくにをせめ饑饉疫病地
震ところどころにあるべし 八 これみなくるしみのはじめな
り 九 そのときひと人なんぢらを患難にわたしなんぢらをころ
さるべし又なんぢらわが名のために萬民ににくまれん 十
このときおほくのもの礙をうけたがひにわたしたがひにう
らむべし 十一 また偽すげんしやおほくおこりておほくの人
をあざむかん 十二 また不法さかんなるによりておほくの人の愛
情ひややかになるべし 十三 されどおはりまで志のぶものハ
すくはるべし 十四 まづ天國のこのふくいんを萬民
に證せんために天下にいひひろめられん。志かる

のち末期いたるべし 十五 このゆゑに預言者ダニエルによりて
いはれたるところの殘暴にくむべきもの聖處にたつをみ
ば(讀ものよくおもふべし) 十六 そのときユダヤにをるものハ
山にのがれよ 十七 屋上にをるものハその家のものをとらん
とておるるなかれ 十八 はたけにをるものハその衣をとらんと
てかへるなかれ 十九 その日ハはらめるものと乳をのまする
婦ハわざはひなるかな 二十 なんぢら冬または安息日にに
ざることをまぬかれんためにいのれ 二十一 そのとき大なるな
やみあり。かくのごとき災難ハ世のはじめよりいまにいた
るまであらざりきまた後にもあらじ 二十二 もしその日をちぢ

なくせられずバ一人(ひとり)だにすくはるゝものなからん。されど
えらまれしもののためにその日(ひ)バなくせらるべし 二三
そのときもしキリストこゝにありかしこにありとなんぢ
らにいふものあるとも信(しん)ずるなかれ 二四 それ僞(いつはり)キリストにせ
預言者(よげんしや)たちおこりておほいなる休徴(しるし)とふしぎなるわざとを
おこなひえらまれたるものをも欺惑(まどは)すことをえべくバこれをもあ
ざむくべけれバなり 二五 われあらかじめなんぢらにこれを
告(つげ)おけり 二六 もしキリスト野にありといふものあるともいづるなかれ
また室(へや)にありといふものあるとも信(しん)ずるなかれ 二七 それ電(いなづま)の
ひがしよりいでゝ西にまでひらめくがごとく人(ひと)の子(こ)もき
たるべけれバなり 二八 それ屍(しかばね)のあるところにハ鷲(わし)あつまら
ん 二九 これらの日(ひ)のなやみのゝちたゞちに日(ひ)ハくらく月(つき)ハひ
かりをうしなひ星(ほし)ハそらよりおち天勢(てんのいきほひ)ふるひうごくべし 三十 その
ときに人(ひと)の子(こ)のしるし天(てん)にあらはるべし。また地上(ちじやう)にある諸族(もろもろのやから)バ
なげきかなしみ人(ひと)の子(こ)の権威(ちから)とおほいなる榮光(さかえ)とをも
て天(てん)の雲(くも)にのりきたるをみん 三一 またその使者(つかひ)たちをつかは
し喇叭(らつぱ)のおほいなる聲(こゑ)をいだしめて天(てん)のこの極(はて)よりかの
はてまで四方(よも)よりそのえらまれしものをあつむべし ○
三二 それなんぢら無花果樹(いちじく)によりてたとへをまなべその枝(えだ)
またやはらかにして葉(は)めぐみいだせバ夏(なつ)のちかきをしる 三三 その

くのごとくなんぢらもすべてこれらのことをみバ時ちか
く門にちかよりたりとしるべし 三四 われまことになんぢらにつげ
んこれらのことことごとく成までこの民ハうせざるべし 三五
天地ハうせんされどわがことばハうせじ 三六 その日その時
をしるものハたゞわが父のみ 天の使もたれもしるものな
し 三七 ノアのときのごとく人の子のきたるもまたしからん
三八 それ洪水のまへノア方舟にいる日までハひと〴〵飲食嫁
娶なとして 三九 こうずゐのきたりてこと〴〵くこれを滅す
でしらざりき このごとく人の子もまたきたらん 四十 その
ときふたり田にあらんに一人ハとられひとりハのこさ
るべし 四一 二人のをんな磨ひきゐらんにひとりハとられひ
とりハのこさるべし 四二 このゆゑになんぢらの主いづれの
ときにきたるかをしらざれバおこたらずしてまもれ 四三 なん
ぢらこれをしれ もし家のあるじ賊いづれのときにきたるその
をしらバそのいへをまもりてやぶらせまじ 四四 さればなん
ぢらもまたそなへせよ。おもはざるときに人の子きたらんと
きなれバなり 四五 時にあたりて糧をこれにあたへさするた
めに主がそのしもべどものうへにたてたる忠義にして智
あるしもべいたれなるぞ 四六 そのあるじのきたらんときかくの
ごとくつとむるをみらるゝ僕ハさいはひなり 四七 まことに

とになんぢらにつげん その全業(もちもの)をこれにつかさどらすべし 四八 もしそのあしき僕(しもべ) おのがこゝろにわが主(しゅ)のきたることおそからんとおもひ 四九 その傍輩(ほうばい)をうちたゝきて酒(さけ)にゑひたるものどもとともに飲食(のみくひ)しをらば 五十 そのしもべの主(しゅ) おもひもよらざるの日(ひ) しらざるのときにきたりて 五一 これをきりころし そのむくいを偽善者(ぎぜんしゃ)とおなじうすべし そこにてなげきて切歯(はがみ)することあらん

第廿五章

そのとき天國(てんこく)は ともしびをとりて新郎(はなむこ)をむかへにいづる十人(にん)のむすめになぞらふべし 二 そのうちの五人(にん)はかしこく五人(にん)はおろかなり 三 おろかなるものはその燈(ともしび)をとりてあぶらをたづさへず 四 智(かしこき)ものはそのともしびとともにあぶらを器(うつは)にたづさへたり 五 新郎(はなむこ)おそかりければ みな假寐(まどろみ)してねむりたり 六 夜(よ)なかによばはりてはなむこきたりぬ いでゝ迎(むかへ)よとよぶこゑありければ 七 この童女(めどもみな)おきてそのともしびをとゝのへたるに 八 愚(おろか)なるものかしこきものにいひけるは われらの燈(ともしび)きえんとすれば ねがはくはなんぢらの油(あぶら)をわれらにわけあたへよ 九 かしこきものこたへていひけるは われらとなんぢらとにおそらくは足(たら)まじ なんぢら賣者(うるもの)にゆきておのがためにかへ 十 かれら買(かは)んとてゆきしとき新郎(はなむこ)きたりければ そなへ

へたるものハこれとともに婚筵にいりしが門ハとぢら
れたり 十一 のちにその餘のむすめきたりていひけるハ
主よ主よわれらのためにひらきたまへ 十二 こたへてわれま
ことになんぢらにつげんわれハなんぢらをしらずといへ
り 十三 されバおのれらをさまして微醒なんぢらその日その時を
しらざれバなり ○ 十四 おほよそ天國ハある人のたびだちせんと
してその僕をよび所有をこれにあづくるがごとし 十五 お
のおのれの智慧にしたがひてあるものにハ銀五千あるもの
にハ二千あるものにハ一千をあたへただちに旅だち
せり 十六 五千の銀をうけしものハゆきてこれをもちゐて
ほかの五千をえたり 十七 二千をうけしものもまたほかに二
千をえたり 十八 しかるに一千をうけしものハゆきて地をほ
りその主のかねをかくせり 十九 ほどへてのちそのしもべた
ちの主かへりきたりてかれらと會計せしに 二十 五千のぎんをうけし
ものそのほかの五千の銀をもちきたりて主よわれに五千
のぎんをあづけしがほかに五千のぎんをまうけたりとい
ひければ 二十一 主かれにいひけるハあゝ善かつ忠なるしもべ
ぞなんぢわづかなることに忠なり。われなんぢに多のものを
つかさどらせんなんぢの主のよろこびにいれ 二十二 二千の
銀をうけしものもきたりて主よわれに二千のぎんをあづけ

しがほかに二千の銀をまうけたりといひければ 廿三 主これにいひ
けるハあゝ善かなちゆうなるしもべぞなんぢ寡なる
ことにちゆうなりき我なんぢに多くのものをつかさどら
せんなんぢのあるじの歡樂にいるべし 廿四 また一千のぎんを
うけしものきたりていひけるハ主よなんぢハきびしき人にて
まかざるところより穫りちらさゞるところより斂らるゝを
しる 廿五 ゆゑにおそれてゆきて主の一千のぎん
を地にかくしおけり今なんぢなんぢのものを得たり 廿六 その
の主こたへていひけるハ惡かつおこたれる僕ぞなんぢハ我
が播ざるところより散ざるところよりあつむるこ
とをしりたるか 廿七 さらバわがかねを兌換舖にあづけおくべ
きなりしならバわがかへりたるとき本と利とをうくべし 廿八
このゆゑにこの僕の一千のぎんをとりて十千の銀あるもの
にあたへよ 廿九 それ有てるものハあたへられてなほあまり
あり無有ものハその有ものをもとらるべければなり
三十 無益なるしもべをそとのくらきにおひやれそこにて哀
哭きりがみすることあらん ○ 三一 人の子おのれのえいくわう
をもてもろ〳〵の聖使をひきゐきたるときハその榮光のくら
ゐにざし 三二 萬國の民をそのまへにあつめ羊をかふもの
の綿羊と小羊とをわかつがごとくこれをわかち 三三 めん

やうをその右にやぎをその左におくべし 三四 かくて王その
みぎなるものにいはん。わが父にめぐまるゝものよきたり
て創世よりこのかたなんぢらのためにそなへられたる
國を嗣 三五 それなんぢらわが飢しときにくらはせ渇しと
きにのませ旅せしときにやどらせ 三六 裸なりしと
きにきせ病しときにみまひ獄にありしときにきたれ
ばなり 三七 こゝにおいて義ものこたへていはん
主よいつなんぢのうゑたるをみて食せまたかわきた
るに飲せしや 三八 いつ主のたびしたるをみてやどらせまた
はだかなるに衣しや 三九 いつ主のやまひまた獄にあるをみて

なんぢにいたりしや 四〇 王こたへていはんにはいはん。誠に
なんぢらにつげん、なんぢらわがこの兄弟のいと
ちひさきものゝひとりにおこなへるはすなはちわれに行
しなり 四一 ついにまた左にをるものにいはん 罰せらるべき
ものよわれをはなれて惡魔とその使のためにそなへ
たるきえざる火にいれよ 四二 それなんぢらわが飢しときわ
れにくらはせず渇しときわれにのませず 四三 旅せしときわれを
やどらせず裸なりしときわれにきせず病またひとやにお
りしときわれを顧ざればなり 四四 こゝにおいてかれらもまた
こたへていはん主よいつなんぢの飢また渇または旅しまた

裸なる病なる獄にあるときこそ主につかへざりしや 四十五 その
ときに王こたへてこれにいはん われまことになんぢらに
つげん。らの至微ものゝひとりにおこなはざりしはすなはち
わたしにおこなはざりしなり 四十六 これらのものはかぎりなき
刑罰にいり たゞしきものはかぎりなき生命にいるべし

第廿六章 さて耶蘇このさまざまの言をいひをはりてその弟子
にいひけるは 二 二日のゝち逾越節なることはなんぢらがしる
ところなり 人の子は十字架につけらるんためにわたさ
るべし 三 このときさいしのをさおよび民の長老たち
カヤパといへる祭司の長のやしきの庭にあつまり 四 詭計
をもて耶蘇をとらへころさんとあひはかりていひける
は 五 まつりの日においてなすべからず おそらくは民のうちに
亂おこらん ○ 六 耶蘇ベタニヤの癩病シモンのいへにあり
つるとき 七 あるをんな蠟石のうつはものにあたひたかき
香膏をもりて耶蘇の食するときにきたりてその首にそそ
ぎし 八 でしたちこれをみていかりをふくみていひけるは
この糜費のことをなすはなにゆゑぞや 九 もしこれをうら
ばおほくの金をえてまづしきものにほどこすをえん
十 耶蘇しりてこれにいひけるは なんぞこの婦をなやま
すや このをんなはわれに善事をおこなへるなり 十一 まづしきもの

ハつねになんぢらとともにあれどわれハつねになんぢら
とともにあらず 十二 この女のこのにほひあぶらをわが體にそ
そぎしハわれの葬のためになせるなり 十三 まことになんぢ
らにつげん天の下いづくにてもこの福音のひろめら
るゝところにハこの女のなせしこともその記念のた
めにいひつたへらるべし○ 十四 そのとき十二門徒のひとり
なるイスカリオテのユダといへるもの祭司のをさたちのも
とにゆきて いひけるハ 十五 われなんぢらにこれをわたさバ
なにほどをあたふるか。つひに銀三十をやくしたり 十六 この
ときより耶穌をわたさんと機をうかゞひぬ○ 十七 またねいれ

ぬ餅のいはひのはじめの日でし耶穌にきたりいひけるハ
われらすぎこしの食をなんぢのためにいづこにてそなふべ
きや 十八 耶穌いひけるハみやこにいりて某にいたりていへ師
いふわが時ちかづきければわれでしとともに逾越のいは
ひをなんぢが家になすべしと 十九 でし耶穌に命ぜられしごと
くしてすぎこしの食をそなふ 二十 日くれて とき耶穌おふ
までしとともに席につき 二十一 食するときいひけるハまこ
とになんぢらにつげんなんぢらのうち一人われをわたさ
んとす 二十二 うれひいたくうれひておのおの耶穌にいひいでけ
るハ主よわれなるか 二十三 こたへていひけるハわれとともにお

手を盃につくるものハすなハちわれをわたすものなり 二四
人の子ハおのれについてしるされたるごとく逝んされど
人の子をわたすものハわざはひなるかなその人うまれざ
りしならバかへつて幸なりしならん 二五 このときわたすユダこ
たへていひけるハラビわれなるや。こたへていひけるハなんぢ
のいへるごとし 二六 かれら食するとき耶蘇パンをとりて祝
しこれを擘てわかちていひけるハ取てくらへこれわが身
なり 二七 またさかづきをとりて謝しかれらにあたへていひ
けるハなんぢらみなこの杯よりのめ 二八 これ新約のわが血
にしてつみをゆるさんとておほくの人のためにながすと
ころのものなり 二九 われなんぢらにつげん今よりのちなんぢ
らとともにあたらしきものをわが父の國にのまん日ま
でハふたゝびこの葡萄よりつくれるものをのまじ○ 三〇 か
れらうたをうたひてのち橄欖山にゆけり 三一 そのとき耶蘇
かれらにいひけるハ今夜なんぢらみなわれにつきてつま
づかん そハしるして牧者をうたバ群のめんやうちらんとしる
されたるなり 三二 されどわれ復生てのちなんぢらにさき
だちカリラヤにゆくべし 三三 ペテロこたへて耶蘇にいひける
ハたとへみななんぢについて躓くともわれハつまづかじ 三四
耶蘇かれにいひけるハわれまことになんぢにつげん

よび雞なかざるまへになんぢ三次われをしらずといはん 三五
ペテロかれにいひけるハわれ主とともにしぬるともな
んぢをしらずといはじと門徒もみなかくいへり ○ 三六 そのとき
耶穌かれらとともにゲツセマネといふところにいたりて門
徒たちにいひけるハなんぢらこゝにをれわれかしこにゆ
きていのらん 三七 ペテロおよびゼベダイのふたりの子をたづ
さへ憂愁かなしみをもよほし 三八 かれらにいひけるハわが
心いたくうれひて死るばかりなりこゝにまちてわれとゝ
もに目をさましをれ 三九 すこしさきにゆきて俯伏いのりい
ひけるハわが父よもしかなふべくハこの杯をわれよりはなち

たまへされどわがこゝろのまゝをなさんとにあらずたゞみ
聖旨のまゝにせたまへ 四〇 きたりて門徒にきたりそのいねた
るを見てペテロにいひけるハかく一時もわれとともに目
をさましをることあたはざるか 四一 なんぢらいざなひにいらぬやう儆
醒ていのれそのたましひはいねがふなれども肉體はよわき
なり 四二 ふたゝびゆきて祈禱いひけるハわが父よもし
わがのまでこのさかづきをのぞかれぬならバみ
こゝろにまかせたまへ 四三 きたりてまた門徒のねむりたるを
みるそのものゝ目つかれたるなり 四四 かれらをはなれて
またゆきて第三次もおなじことばをもていのれり 四五 つひに

その門徒にきたりていひけるハ今ハいねてやすめ時ハち
かし人の子つみびとの手にわたさるゝなり 四六 起よわれらゆく
べしわれをうるものちかづきたり○ 四七 かくいへるとき
十二のひとりなるユダ刃と棒とをもてる多くの人々
ともにおほさいしのをさと民の長老のもとよりきたる 四八 耶蘇
をうるものかれらにしるしをなしていひけるハわが接吻せ
るものハそれなりこれをとらへよ 四九 たゞちに耶蘇にきたり
てラビやすかれといひてこれにくちつけす 五十 耶蘇これに
いひけるハ友よなんのためにきたるや。つひにうちよりすゝ
みきたり手を耶蘇にかけてとらへぬ 五一 耶蘇とともにあり

しものゝひとり手をのべ剣をぬきてさいしの長のしもべ
をうちその耳をそぎおとせり 五二 耶蘇これにいひけるハなん
ぢのつるぎをもとにをさめよ。すべて剣をとるものハつ
るぎにてほろぶべし 五三 なんぢいま十二軍餘の天使をわがち
ちに求てうくることあたはずとなんぢらおもふや 五四 もし
然せバかくあるべきことゝしるせし聖書はいかでかなりな
んや○ 五五 このとき耶蘇ひとびとにいひけるハつるぎと棒と
をもちてぬすびとをとらふるごとくしてわれをとらへに
きたるか。われ日々なんぢらとゝもに殿にざしてをしへし
になんぢら我をとらへざりし 五六 されどかくのごとくなる

ハこゝな預言者のしるしたるところは應成せんためなり。つ
ひにでしたちみな耶蘇をすてゝにげさりぬ○五七耶蘇を
とらへたるものこれをひきて學者と長老のあつまれるとこ
ろの祭司のをさカヤパにつれゆく 五八ペテロとほくはな
れて耶蘇にしたがひ祭司のをさの庭にまでいりその結
局をみんとて内にいりしもべとともにざせり 五九さいしの
をさたちおよび長老すべての議官ともに耶蘇をころさん
として妄證をもとむれどもえざりき 六〇おほくのいつはりの證
者きたれどもまたえざりき後にまたいつはりのあかしびと二人
きたりていひけるは 六一この人さきにいへることあり

よく神のみやをこぼちて三日のうちにこれを建なほす
し 六二さいしのをさ起ていひけるはなんぢこたふ
ることなきかこの人々のなんぢにたてる證據はいかに
六三いゑは黙然たり。さいしのをさこたへてこれにいひける
はなんぢキリスト神の子なるや。われなんぢを活神にちか
はせてわれらにつげしめん 六四耶蘇これにいひけるはなんぢが
いへるごとし。かつまたなんぢらにつげん。この人の子
大權のみぎにざし天の雲にのりてきたるをなんぢらみる
べし 六五こゝにおいて祭司のをさそのころもを裂ていひけ
るはこの人はけがしごとをいへり。なんぞほかにあかし

とまくめんやなんぢらも今その褻瀆たることばをきゝし 六六 なんぢらはいかにおもふや こたへていひけるはかれは死におよべり 六七 こゝにおいてかれらその面につばきし また拳をもてうてり。またある人々はかれをたゝきいひけるは 六八 キリストよなんぢをうつものは誰なるや予言せよ〇
六九 ペテロ外にて坐しゐけるにある婢きたりてなんぢもガリラヤの耶蘇とともにありといひければ 七十 ペテロすべての人のまへにてこれをうけがはずしていひけるはなんぢがいふところをしらずと 七一 いでゝ門にいたりしときに他の婢かれを見てそこにをるものにいひけるはこれの人もナザレの耶蘇とともにありき 七二 ペテロまたうけがはずして誓をたてその人をしらずといへり 七三 しばらくありてそこにたてるものちかよりてペテロにいひけるはまことになんぢもその黨のひとりなり なんぢの口音なんぢをあらはせり 七四 こゝにおいてペテロのゝしりちかひてわれはその人をしらずといひしがやがて雞なきぬ 七五 ペテロ耶蘇の にはとりなかざるまへになんぢ三次われをしらずといはんといひたまへる言をおもひいだしそとにいでゝ悲慘なげけり

第廿七章

平旦にありてすべての祭司の長と民の長老より

共にはかりて耶蘇をころさんとし 二 ものにこれを縛りひき
ゆきて方伯のポンテオ ピラトにわたせり ○三 ここにおい
て耶蘇をわたせし ユダ このものの死にさだめられしをみて悔
その銀三十をさいしのをさ長老だちにかへしていひけ
るは無辜の血をわたしてわが罪をおかしぬ かれらいひけ
るはわれらにおいてなんぞ與らんや なんぢみづから當べ
し 五 ユダその銀を殿になげすてそこをさりゆきてみ
づから縊たり 六 さいしのをさたちこの銀をとりていひけ
るはこれ血のあたひなれば賽銭のうちにいるべからずとて
七 さらにはかりてその銀をもて旅客をはうむるために陶工
のはたけをかへり 八 故にそのはたけはいまにいたるまで血田と
なづけらる 九 ここにおいて預言者エレミヤによりいひたま
ることばにイスラエルの民にねだもられしもののあ
たひの銀三十はとられ 十 主のわれに命ぜしごとくやきもの
しのはたけを買ぬとあるにかなへり ○十一 さて耶蘇はつかさ
のまへに立つかさ耶蘇にとふていひけるはなんぢはユダヤ
びとの王なるか 耶蘇これにいひけるはなんぢがいへるご
とし 十二 祭司のをさ長老だちこのものをうつたふれどもなにもの
こたへをせざり 十三 ここにおいてピラトこのものにいひけるはこ
の人々なんぢにたてつる證のかくおほいなるをなんぢききての

ざりしかば方伯のいとあやしとおもふまでに耶蘇ひとことも
こたへせざりき 一五 このまつりの日ごとに方伯より民のねがふ
にまかせてひとりの罪人をゆるすの例ありしが 一六 ときに
バラバといへる一人のあらきざいにんありければ 一七 ピラト民
のあつまりしときこの民にいひけるハ バラバかまたハキリ
ストととなふる耶蘇なるか。なんぢらたれをゆるさんとお
もふや。こハ民 嫉妬によりて耶蘇をわたしたりと志れバなり
〇 一九 方伯さばきの座にをりしときその妻いひつかはし
けるハこの義人になんぢかゝはることなかれ そハわれけ
ふ夢のうちにこの人のためにいたくくるしめりと 二〇 祭司の
をさ長老たちバラバをゆるし耶蘇をころさんことをねがふべく
と民をすゝむ 二一 方伯こたへてこの二人のうちいづれをゆるさんこと
をのぞむや。かれらバラバとこたふ 二二 ピラトいひけるハさらバキリストと
となふる耶蘇をばいかにすべきか。衆みな十字架につ
けよと 二三 ついでにいひけるハこの人なにの悪事をなせしや。この
ものらますますさけびて十字架につけよといふ 二四 ピラト その
詞の益なくしてたゞ乱のおこらんことをしり水をとりて
ひとびとのまへに手をあらひいひけるハこのたゞしきひとの
の血につきてハわれつみなしなんぢらみづからこれを當るべしと

みなこたへていひけるハその血ハわれらとわれらの子
孫にかゝるべしといふ 二六 こゝにおいてバラバをゆるしてやり
耶穌をむちうちて十字架につけんためにわたし
けり 二七 つかさの兵卒ハ耶穌を公廨にひきいて組中
をそのもとにあつめ 二八 耶穌のころもをぬがせ緋色の
袍をきせ 二九 いばらの冠をあみてその首にのせまた
葦をみぎの手にもたせそのまへにひざまづき嘲弄し
ていひけるハユダヤびとの王やすかれと 三〇 唾しそ
の葦をとりてそのかうべをうてり 三一 かくなぶりしのちそ
そのうちぎを褫ぎもとのころもをきせて十字架につけんため

うれとひきゆく 三二 そのいでしときクレネびとのシモンと
いふものにあひければ強てこれにその十字架をおはせさ
す ○ 三三 このところゴルゴダ譯ばされかうべとよぶところに
きたり 三四 醋に膽をあはせて耶穌にのませんとしたりしに
嘗てのむことをせざりき 三五 かくて耶穌を十字架につけ
しのち鬮をとりてそのころもを分ちしハ預言者のことばに
このことたがひにわが衣をわかちわが裏衣をくじにひ
くとあるにかなへり 三六 兵卒らここにざして耶穌をまもれり 三七 また
罪標にこれハユダヤびとの王耶穌なりとしるしてその首
のうへにかけたり 三八 そのとき二人のぬすびと耶穌とともに

ひとりハその右ひとりハその左に十字架につけらる〇 三九
ゆきゝのもの耶蘇をのゝしり首をふりていひけるハ 四〇 殿
をこぼちて三日にこれをたつるものよみづからをすくへ
なんぢもし神の子ならバ十字架よりおりよ 四一 祭司の長らがく
しや長老たちもまたおなじく嘲弄していひけるハ 四二 人をも
すくひておのが身をすくふことあたはず もしイスラエルの王たら
バいま十字架よりくだるべし さらバわれらこれを信ぜん
四三 かれハ神によりたのめり 神もしかれをよろこびたまハバ今
すくふべし そハかれハ われハ神の子なりといひしなり 四四
ともに十字架につけられたる盗もおなじく耶蘇をのゝし

りけり 四五 晝のおよそ十二時より三時にいたるまで全地あまね
く黒暗となる 四六 三時ごろ耶蘇おほごゑにエリエリラマ
サバクタニとよばはりぬ これを譯バ わが神わが神なんぞ我
をすてたまふやといへるなり 四七 そこにたちたる者
のうちある人これをきゝて このひとハエリヤをよべるなりと
いふ 四八 そのうちの一人たゞちにはせゆきて海絨をとり醋をふ
くませこれを葦につけて耶蘇にのましむ 餘人いひける
ハ 俟 エリヤきたりてこれをすくふや否みるべし〇 五十
耶蘇ふたゝび大聲によばはりて氣たえたまへり 五一 みやの幔うへよ
りしもまでさけて二つとなり また地ふるひ磐さけ 五二 墓ひら

けてすでにいねたる聖徒の身おほくよみがへり耶穌のよ
みがへるのち 五三 墓をいでゝ聖城にいりおほくのひとに
あらはれたり○五四 百夫の長とゝもに耶穌をまもりたるもの
の地震およびそのありしことを見て甚おそれていひけるはまこと
に神の子なりといへり○五五 このところに遙にのぞみをる
おほくの婦ありしがこれはガリラヤより耶穌にしたが
ひつかへしものどもなり 五六 そのうちにありしものはマグダラ
のマリアとヤコブヨセのはゝなるマリアとゼベダイの子
たちの母なり○五七 日くれて耶穌のでしなるヨセフとい
へるアリマタヤの富人きたりてピラトにゆき耶穌の尸を
ねがひしかば 五八 ピラトその屍をわたせと命ぜり 五九 ヨセフ
そのしかばねをとりてきよき枲布につゝみ 六〇 これを磐にほり
たるおのがあたらしき墓におきおほいなる石をはかの門に
まろばしてさる 六一 マグダラのマリアとほかのマリアとは
はかにむかひて坐しそこにをれり○六二 預備日の翌日祭司
のをさとパリサイのひとびとピラトのもとにつどひきたりて
いひけるは 六三 主よわれらおもひいだせり。この偽者いきて
をりしとき三日の後よみがへらんといひし 六四 このゆゑに
命じて三日にいたるまで墓をかためしめよ。おそらくはその
のでし夜きたりてこれをぬすみて死よりよみがへりたりと

民にいはんもしかくせば後のまどひは先よりもいやまさるべ
し　六五ピラトこれにいひけるはなんぢらに守兵ありゆ
きておもひのまゝにこれをかためよ　六六かれらはいでてこのまゝ
ゆきて石に封印しまもるものをして墓をまもらしめたり

第廿八章

一安息日をすぎてのち七日のはじめの日よあけがたに
マグダラのマリアおよびほかのマリアその墓をみんとて
きたりしに　二おほいなる地震ありて主のつかひ天よりく
だり墓のもんより石をまろばしそのうへに坐せり　三その容
貌はいなづまのごとくその衣服はゆきのごとくしろかりし
四守兵かれをおそれてふるひ死たるもののごとくなりぬ
五天使こたへてをんなにいひけるはなんぢらおそるゝこ
となかれわれなんぢらが十字架につけられし耶蘇をたづ
ぬることをしる　六このところにあらずそのいひしごとく
復生たりなんぢらきたりて主のおかれしところを見よ　七
いそぎゆきてその門徒につげよかれは死よりよみがへりな
んぢらにさきだちてガリラヤにゆけりかしこにおいてなん
ぢらかれをみるべしわれこれをなんぢらに告たり　八をんなお
それおのゝきもいとよろこびて急ぎそこをさりその門徒につ
げんとはしりゆけり　九でしにつげんとてゆくとき耶蘇か
れらにあひて安かれといひたまひければ婦きたりてその足

をいだきて拜しぬ 十 耶穌これらにいひけるハおそるゝな
かれさりてわが兄弟にガリラヤにゆけとつげよそこにて
われをみるべし ○ 十一 婦のさりしのち守兵のうちあるもの
どもみやこにいりてすべてありしことを祭司のをさたち
につげしらせ 十二 かれらと長老あつまりてともに議をはかりおほくの
かねを士卒にあたへていひけるハ 十三 なんぢらいへわれら
がいねたるときその門徒よるきたりてこれをぬすめりと 十四
このことをし方伯にきこゆるともわれらこれをなだめて
なんぢらに憂慮なからしめん 十五 かれら銀子をとりていひふ
くめられたるごとくなしたり於是このことばいひふらし今
日にいたるまでユダヤ人のうちにいひひろめられたり ○
十六 夫十一のでしガリラヤにゆきて耶穌のこれらに命じたま
ふところの山にいたり 十七 耶穌をみて拜せりされどうたがへ
るものもありき 十八 耶穌すゝみてこれらにかたりていひける
ハ天のうち地のうへのすべての權をわれにたまはれり 十九
このゆゑになんぢらゆきて萬國の民にバプテスマをほどこし
しこれを父と子と聖靈の名にいれてでしとなせ 二十 これらにわが
なんぢらに命ぜしことをまもれとこれにをしへ
よそれわれハ世のをはりまでつねになんぢらとともにあ
るなりアーメン

馬太傳福音書終

米國聖書會社藏板
PRINTED FOR THE AMERICAN BIBLE SOCIETY

95-91192

MAR 22 1989